

古代東地中海地域における国家，貨幣，銀行： アテナイ，エジプト，ローマを中心に*

明 石 茂 生

1. 序論

紀元前2千年末 (ca. 1200BC) の東地中海世界の崩壊¹⁾ の後，前1千年初めには東地中海の各地でゆっくりとしながらも社会的再構築が始まっていた。ギリシア本土においてもこの時期暗黒時代と呼ばれながらも，のちの都市国家 (ポリス) につながる共同体の形成と付随して神殿建物の建立が随所でみられるようになった²⁾。前9世紀には早くも，先進地であるレバントからフェニキア商人がキプロス，クレタを經由して，東方の (金属細工，織物，陶器などの) 文物や製造技術をギリシアに伝え，逆にギリシア人がキプロスやシリア (アル・ミナ) に達して，技術習得や交易活動に携わっていた。いわゆる「東方化 (orientalization)」が前9，8世紀にわたりギリシア世界に浸透していたわけであり，とりわけフェニキア人を通じてアルファベットが導入され，ギリシア語に対応して改良されていったといわれている³⁾。

前8世紀後半から前古典期 (the archaic period) に入り，各地で都市が形成されるとともに人口が増加していった。人口圧と資源確保の問題から黒海やシチリア・南イタリアに入植が始まり，「大植民時代」を迎えること

* 本稿は，平成27年度成城大学国内研修ならびに平成28年度成城大学経済研究所第1プロジェクト (成熟経済の歴史的位相) の研究成果の一部である。

1) Drews (1993)

2) Osborne (1996: 70-136), 桜井・本村 (1997: 46-57).

3) Burkert (1992: 13-24), Osborne (1996: 37-52), 桜井・本村 (1997: 37-52).

になる。植民都市が小アジア、黒海沿岸、イタリア、アフリカ(キュレネ)に設立され、海路を通じて本国都市と植民都市間のネットワークが形成されるようになった⁴⁾。さらにギリシアとエジプト間の交易の足跡が前7世紀から残されており、エジプトにもナイル河畔にギリシア商人の居留地ナウクラテスが建設された⁵⁾。先の暗黒時代を引き継いで前古典期には、東地中海を舞台にギリシア人とフェニキア人による交易システムが出来上がっていったのであり、付随して硬貨以前の貨幣(銀塊)が交換媒体として使用されていた⁶⁾。このような状況下で、前7世紀末(または前6世紀初め)に硬貨(coin)がリュディアで鑄造・使用され、前6世紀後半には小アジア沿岸の諸都市からギリシア本土に瞬く間に伝播し、世紀末にはエーゲ海の各都市国家で硬貨が鑄造されるようになっていた⁷⁾。加えて、前6世紀にはアルファベットを使用した数字(acrophonic numerals)が使われるようになり、世紀末には算盤(*abax*)が出現して、複式簿記には程遠いが、収入、支出、利潤の計算ができるようになっていた⁸⁾。

古典期に入ると、ペルシャ戦争後のデロス海上同盟の結成を契機に、同盟諸都市からの貢租金(tribute)が当初はデロス島に、後にはアテナイに納められるようになり、エーゲ海沿岸を版図とする「アテナイ帝国」の枠組みが形成されるようになった⁹⁾。アテナイは「帝国」の実質的首都となり、ラウリオン銀山からの銀貨供給も背景にして、経済的資源がアテナイに集中するようになった¹⁰⁾。アテナイの外交政策は、不満を持つ周辺都市に対し強硬になりがちであり、境界域の紛争はスパルタを中心とするペロポネ

4) Osborne (1996: 104-29), Tandy (1997: 59-83).

5) 周藤 (2014: 51-54)

6) Kroll (2008: 35-36)

7) Schaps (2004: 104-5), von Reden (2010: 70).

8) Faraguna (2008: 37-57)

9) Morris (2009: 165). ただし I. モリスによれば、前5世紀のアテナイは帝国主義の一例としてよりは国家形成の一例としてみるべきということである。

10) Morris (2009: 144-49)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心にソス同盟との間に軋轢を高め、最終的にはペロポネソス戦争を引き起こすにいった。この戦争は最終的にはアテナイの降伏に終わるのであるが、敗因のひとつにエーゲ海の制海権をスパルタに奪われ、穀物などの重要物資の輸入が不可能になったことがあり、資源の確保を交易に頼っていた「アテナイ帝国」の安全保障上の脆弱性を衝かれた結果ともいえる。

前4世紀になると、政治的覇権がスパルタからテーベに移り、世紀後半には領域国家のマケドニアが台頭して、ギリシア諸都市をその影響下に置くようになる。それでもアテナイは世紀前半には第2次海上同盟を復活させて制海権を取り戻し、世紀後半以降マケドニアの圧力の中で国内改革を断行して、結果経済的な復活と発展を一時的に実現することができた。

次のヘレニズム期は334BCに始まるアレクサンドロス大王の東征によって幕が開ける。大王の没後、後継者による征服国家が相対立しながらも東地中海地域に鼎立して、統治し続ける体制ができあがる。この間、ギリシア人の大量移民に伴って、ギリシア文化と制度が導入されて特有の統治体制が確立し、大王も含めて国王の肖像を打刻した硬貨が大量に供給され、同時に東地中海を舞台にした交易活動が活性化するという複合的な状況が生まれていた。さらに前2世紀後半からローマが進出して、東地中海地域を次々と属州化していった。この地域から大量の資金が租税、地代、賠償金形でイタリアに流入し、他方でイタリア国内では公共事業や国外で軍事支出、また元老院議員などを中心とした富裕層による小アジア、レバント、エジプトからの奴隷や嗜好品の購入により資金が流出して、イタリアにおいて経済成長の中で資金循環のメカニズムがヘレニズム期後半に形成されるようになった¹¹⁾。

11) ヘレニズム期の経済的活動への学術的関心は、一連のコンファレンスやそれらを通じて編集された論文集の発表などに代表されるように高まってきているように思われる。その際の視座は、例えば第3回論文集 *The Economies of Hellenistic Societies* をとりあげると、「どの時点でも、どのような社会または政体—実際どんな個人でも—3つの行動様式〔生存様式、指令様式、市場様式〕を同時に示している」ことであり、「様式間の重要度のバランスがど

この古典期／ヘレニズム期にみられた社会経済的現象には、都市国家集団、領域国家、帝国への国家組織の進化過程のほか、貨幣が国家の支払い手段として鑄造・供給され、市場（交易）のルートを使って人々が国家への支払い手段を調達するという、一部意図的、一部自然の制度形成を通じて成立した資金循環過程が内包されている。そこに古代から近世にまで通じる貨幣経済の枠組みが見られるのであり、換言すると、前近代経済において貨幣経済をどのように理解するかへのヒントが隠されているともいえる。本稿は、古典期／ヘレニズム期を題材に取り上げることにより、まさしくこの貨幣経済の枠組みを金融仲介者による信用供与の機能も含めて理解しようとするものであり、本稿の究極の主題であるともいえる。

以下、次のように展開する。次節で古典期のアテナイ経済が取り扱われ、人口と交易に絡ませて「アテナイ帝国」での交易システムの成立、それに関連させて貨幣供給、国家財政、金融仲介者（銀行家）の役割が議論される。第3節ではヘレニズム期の交易活動、大量の貨幣発行、都市国家における国家銀行の発展に触れた後、ギリシア人征服国家であるプトレマイオス朝エジプトの統治体制と王立銀行の関係が扱われる。その後、ローマの進出に触れ、ヘレニズム期後半におけるローマ共和制経済の発展と東地中海の交易の展開の間に密接な関係があり、この時期マクロ的な貨幣循環システム（ホプキンズ・モデル）が成立していたことを述べる。この文脈でイタリアの実業家、金融仲介者、銀行家の存在意義についても触れることになる。最後に先に述べた本稿の主題について改めて議論されることになる。

2. 古典期：アテナイ

2.1 人口と交易

ギリシア本土を含めたエーゲ海周辺地域の気候は、夏暑少雨、冬寒多雨

のように、どのくらい、なにゆえ時間を通じ変化したかの問題を扱う」ことにあるという (Archibald, Davies and Gabrielsen 2011: 3)。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
で気候変動が多い地中海性気候で特色づけられる。より細部に注目すると、
アドリア海を望む本土西岸ならびにトルコ西南部は降水量が比較的多く、
テッサリア、エピルスの山間部では年間1,200mmの降水量を記録する一方
で、エーゲ海周辺はより乾燥し、とりわけアテナイが位置するアッティカ
地方とエーゲ海南部にあるキクラデス諸島は年間400mm以下という極端な
乾燥地域となっており、いわゆる **dry-farming** に適した地域である。

農法は大麥主体の栽培から後に小麦への嗜好が強まって小麦栽培に移っ
ていくが、収穫・種籾比は、小麦が4.8：1、大麥が6：1とされ、メソポ
タミアやエジプトに比べると生産性は低かった¹²⁾。これは、この地域内で
自己充足できる扶養人口は限定的であることを意味し、都市を含め全般的
な人口成長をみた紀元前6世紀はこの許容限度に迫り、500BC頃には多
くの都市が穀物輸入に頼るまでにきていた¹³⁾。

古典期（紀元前4、5世紀）のアッティカ地方に限ってみると、その面積
はおよそ2,400km²で、耕作可能なのは20～40%といわれる。穀物生産、
消費、輸入の推計についてはさまざまな研究があり¹⁴⁾、ここではそれら推
計の差異を踏まえて許容可能な推計値を再考した Moreno (2007: Table 1)
にしたがって、以下のように要約することにしよう。

耕地比率 38%、実耕作比率 17.5%、大麥：小麦 4：1

生産性 600kg/ha、収穫・種籾比 5：1、総生産量 2万トン（70万メテム
ノイ）

一人当たり年間消費量 237kg/人、扶養人口 8万4,000人、扶養能力
35人/km²

古典期平均人口 27万人、必要穀物量 6万4,000トン、自己充足率

12) Garnsey (1998: 204). ちなみに紀元前3千年紀バビロニアでは大麥で15：1
(Jacobsen 1982)、プトレマイオス朝エジプトでは小麦で10：1 (Crawford
1971:125-57)であった。

13) Morris (2006)

14) Jardé (1925), Garnsey (1988), Osborne (1987), Sallares (1991).

31%

すなわち、前4、5世紀中のアッティカ地方が自前で扶養できる人口は8～9万人ほどであり、穀物輸入がどの程度であったかは推計が難しいのであるが、ボスポロス国王レイコンより40万メデムノイの穀物を輸入し8万人がその給付を受けたというデモステネスの記述から、年一人当たり5メデムノイ(259.2ℓ)として、M. H. ハンセンの推計により350BC以降のアッティカ人口を25万人とすれば、必要大麦は125万メデムノイとなる¹⁵⁾。これに基づいてブレッソンはアッティカ、レムノス、インブロス島(アテナイ領有地)の収穫量を329/8BCのエレウシス神殿奉納穀物量より算出して、次の表1のような前4世紀半ばアッティカ地方大麦輸入先を導出している¹⁶⁾。

全輸入量に対する本国(アッティカとレムノス・インブロス)の比率は40%ほどであり、残りが外国からの輸入分となる。そのうちで黒海地域の比率

表1 前4世紀半ばアッティカ地方大麦輸入先内訳

	数量	%
アッテカ	340 ^a	27.2
レムノス・インブロス	150	12.0
ポントス(黒海)	400	32.0
キュレネ	90	7.2
エジプト	90	7.2
西部	90	7.2
その他	90	7.2
計	1250 ^b	100.0

数量単位：000medimnoi=51840liters

注) Bresson (2016: Table 14.4)

a) 329/8BC エレウシス神殿奉納穀物より産出

b) 340~330BC アッテカ人口を25万人とし、年間大麦消費量を5med/人として算出。

15) Dem. against Leptines 20.31-3. Garnsey (1988: 96-97), Hansen (1988: 12, 2006: 56).

16) Bresson (2016: 409-11)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
は32%であり、その重要性が印象付けられる。ただしこれはボスポロス
王国との関係が深まった前4世紀前半の特異な状況を反映していたといえ
なくもない。黒海からの小麦輸入は前4世紀半ば以降はヘレポントスから
アテナイへの航路の安全性がマケドニアにより脅かされるにおよび、重要
度が低下しその分そのほか（エジプト、キュレネ、シチリア）の比率が上が
ったと推測されるからである¹⁷⁾。

アッティカ地方の人口については、431BCには16-17.2万人から30-
35万人、4世紀半ば以降では15-20万人から20-25万人と推計上のばらつ
きが大きいのであるが、このような異なる諸推計をふまえて、アッティカ
地方の人口構成を次のようにまとめてみた。

全体として前5世紀から前4世紀に移るとともに、総人口は減少し、他
方で前431年（ペロポネソス戦争直前）に在留外国人 (*metioikos*) の総数はピ
ークを迎え、前4世紀に入るとその数は減少したが、その後次第に増え、
後半には加速度的に増加した¹⁸⁾。その間、農業部門の担い手が自由労働か
ら奴隷労働に移っていったのではないかと考えられている¹⁹⁾。前4世紀末

表2 アッティカ地方人口構成

単位：000人	431BC	前4世紀半ば以降
男子市民	40-50	21-30
市民	160-175	90-120
在留外国人	25-50	10-30
奴隷	65-100	50-100
計	250-325	150-250

17) 紀元前5世紀以前においても黒海とギリシア世界との交易は確認されている
が、アッティカ地域との交流は6世紀末・5世紀初めになってからであり、
穀物交易は後半（または末）になってから顕著になったであろうと推測され
ている。Ščeglov (1990), Artz (2008: 19-28), Tsetschladze (2008).

18) Garland (1987: 59, 2008: 113)

19) ペロポネソス戦争後の富裕層（資本家）による自由労働から奴隷労働への転
換への傾向については Hopper (1979: 105-6) を参照。他方、奴隷労働は家事、
製造業、鉱山などで比較的安定した需要があったとされている。Osborne
(2002) 参照。

になると、ラミア戦争以降総人口（とくに市民層）は減少していったとされる²⁰⁾。前431年以前の総人口が30万人余と推計されるとすれば、自己充足できる扶養人口が8.4万人程度の状況の下では人口の2/3～3/4が地域外からの穀物輸入に頼らざるをえなかったことになる。戦争以前では穀物輸入に対しては政府の関与は役職給付などによる間接的なものであり、穀物輸入は民間による商業的運輸に頼っていたと考えられている²¹⁾。古典期を通じてアテナイを中心にした交易ネットワークに注目せざるをえない所以である。

そこで古典期を通じた交易ネットワークを考えてみる。先の前4世紀半ばの大麥調達区域表でふれたように、分業化を通じた交易システムはエーゲ海域を中心に、黒海、エジプト、キュレネ、シチリア・南イタリアが繋がる形に成っていたとみてよい。それぞれが穀物の輸出地域であるのに加え、特産物として、黒海地域は塩漬け魚、奴隸、鉛物、エジプトは亜麻、ナトロン、キュレネはワイン、オイル、シルフォン、シチリア・南イタリアは羊毛などがあげられる。いわゆる原材料、食料品の類である。対してエーゲ海域からの輸出産物は、黒海地域にはワイン、オイル、野菜、果実、エジプトには銀、木材、ワインなどであり、キュレネ、シチリア、南イタリアはエーゲ海域と気候帯の点で重なり、競合する産物が多くなり優位性のある特産物（農産物）は見当たらなくなる。強いて交換の対象となる産物をあげるとすれば、交易中継地として入手できる北方の材木、鉛物、黒海沿岸地域や中東からの特産物であったろうし、集積された原材料をもとに製造された、地元とでは調達できない陶器、大理石、織物、武器、家具、船舶その他嗜好品などであったろう²²⁾。もちろん、アテナイの輸入代金の対価として支払われる有力な物品が銀貨であったことはいうまでもない。

20) Oliver (2007: 87-100)

21) Garnsey (1988: 132)

22) Isagar and Hansen (1975: 38-42), Erxleben (1975), Hopper (1979: 97-98).

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

この他にエーゲ海域内では、コス、クニドス、ロードスのワイン、マケドニア・トラキアの木材、鉱物（鉄、銀）、奴隷、カルキディケのワインや鉄、テッサリアの穀物、キクラデスの明礬、塗料、香水、大理石、ペロポネソスの羊毛、亜麻、ポイオティア、エウボイアの鉄、そしてミレトス、コリントス、メガラ、アテナイなど都市における織物など特産品は多様であり、エーゲ海域内での交易活動の余地は十分に存在していた²³⁾。その中で面積と人口の点で、農産物に優勢をもちえないアテナイ（アッティカ地方）にとって交易上優位に立ちうるのは、他の地域では得られない産物を入力しうる中継地として優位性と、技術的に優位に立った製造物ならびに鉱物資源（すなわち銀や鉛）であったと考えられる。

2.2 貨幣

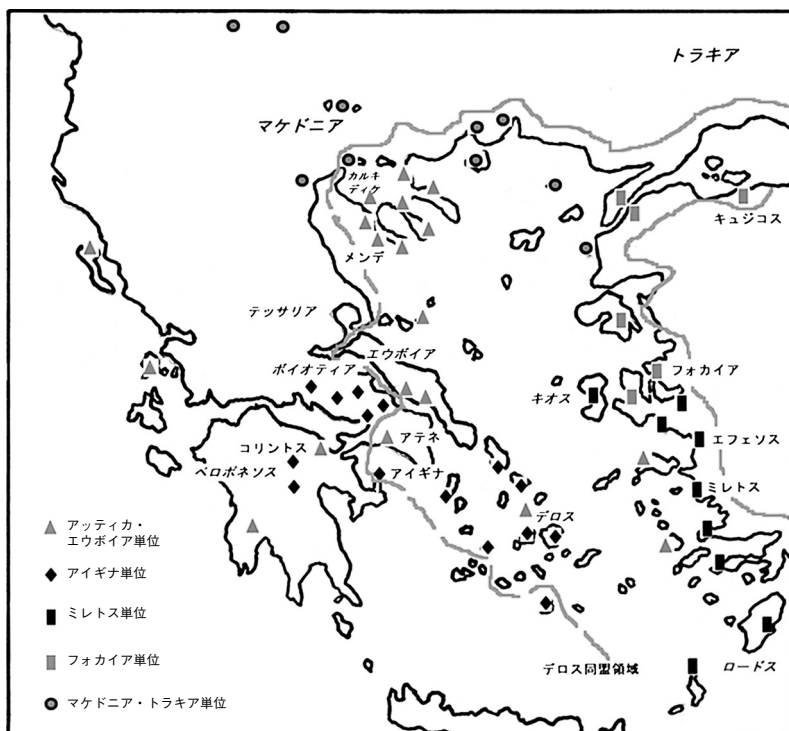
ギリシア世界で特筆すべきことは、硬貨（コイン）が都市国家との関わりの中で発行され、地域通貨圏＝交易圏を形成してきたことである。硬貨の起源は、トルコ西部リディアにおいてみられたわけであるが、考古学上リディア国王クロイソス以前にエフェソスのアルテミス神殿からエレクトロン（金銀混合）硬貨が発見され、前7世紀後半（または末）には使用されていたと推定されている²⁴⁾。一定の重量単位の下で発行されたエレクトロン貨は、リディアがクロイソス王を経てペルシャ帝国に統合された（545BC）後も法貨として使用されていた²⁵⁾。硬貨のアイデアはサルデイスからミレトス、フォカシアなど小アジアの諸都市に伝わり、金貨銀貨が生産されるにいたった。このような共通の重量単位を伴った硬貨の発想は一挙にギリシア本土に伝播し、ギリシア本土で最初に銀貨を鑄造した都市はアイギナであり、小アジアで最初に金貨や銀貨が鑄造された時期とほぼ同じであっ

23) Bresson (2016: 351-58)

24) Cohill and Kroll (2005: 613-14), Schaps (2004: 93-96).

25) Carradice (1987), Schaps (2004: 98).

図1 前古典期地方通貨単位分布図



注) von Reden (2010: Appendix 2) より作図

た²⁶⁾。アイギナ・スタテル (=2ドラクマ) の重量は12.1gであり、ほかの小アジア諸都市での単位とは違っていた。共通の重量単位をもつ硬貨を発行・使用していた諸都市は、いわば地域取引圏を共有していたとも考えられ、図1の鑄造分布から判断できるように、紀元前6世紀末にはエーゲ海域では幾つもの固有の地域通貨=取引圏が形成されていた。アイギナ単位は、紀元前6世紀後半にはペロポネソス半島、(デロスとメロスを除いた)

26) Kraay (1976: 30ff), Kroll and Waggoner (1984), Schaps (2004: 103-5), von Reden (2010: 70).

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に南エーゲ海諸島、中央ギリシア、テッサリア、ボイオティアで採用され、後々まで続く広範な通貨＝交易圏を反映していた。それは、アイギナ単位の優位性を示し、「前古典後期の交易にアイギナが優勢な役割を果たしていた」²⁷⁾ことを意味する。

他方、アテナイでは遅れてアイギナとは別の重量単位をもった硬貨が鑄造され始めた。1スタテル＝2ドラクマの重量は17.2gであり、エウボイア、サモス、コリントスはこれと同じ単位（ただし1スタテル＝3ドラクマ）を共有していた。のちにアテナイ人は1スタテル＝4ドラクマに変更し、新しいデザインの銀貨を鑄造し始めた。アテナイ人が共有した単位（アッテカ単位）は先の地域のほかにデロス、カルキディケ（ギリシア北部半島）、キュレネ（リビア東部）、シチリア諸都市にまで共有され、それら諸都市を結ぶアッティカの近接地域を超えた通貨圏には地域性を超えた海洋性の交易ネットワークを彷彿させるものがある。

この他に小アジア北西部フォカイアを中心とした通貨圏、南西部ミレトスを中心とした通貨圏、南部とキプロスを中心としたペルシャ（シグロイ）通貨圏がみられ、マケドニア・トラキア地域では種々の単位が混在し、南イタリアでは独自の重量単位が使用されていた。紀元前480年ごろまでには115以上の鑄造所が確認されており、6世紀後半を通じて一挙にエーゲ海域に硬貨鑄造が広まったことを示している一方で、局地的な交易を反映させるものであったことも見逃せない²⁸⁾。

アテナイはペルシャ戦争後478/7BCにデロス海上同盟を結成し、結果アイギナ単位を凌駕する通貨ネットワークを形成することとなった。この軍事同盟により形成されたアテナイを中心とした海軍力を維持するため、加盟諸都市から貢租が徴収され、当初はデロス島の金庫に納められていたが、454BC以降金庫はアテナイに移され、アテナイはその資金を自己都

27) von Reden (2010: 72)

28) Osborne (1996), Kim (2001), von Reden (2010: 71).

合で処分する権能をもつことになり、その結果アテナイと同盟諸都市の間に従属関係が生まれ、この関係は別名「アテナイ帝国」と呼ばれている。特記すべき点は、この時期以降（同盟が解消するまで）、貢租、(穀物・原材料購入と製造物販売などの) 交易そしてアテナイ通貨発行によって支えられた経済循環を伴った一大通貨=交易ネットワークが形成され、維持されるようになったことであり、その過程でアッティカ単位の通貨が国際通貨としての地位を獲得し、その受領性の高さからシリア、エジプトにまで伝わり、その模倣通貨が出現するまでに至ったことである。国際通貨としての地位は、ペロポネソス戦争後（海上同盟が解体した後）でも継続し、ヘレニズム時代に入りアレクサンドロス通貨の大量発行となってもアッティカ単位が採用され続けていた。

同盟諸都市からアテナイに納付された貢租の内容を記した「アテナイ貢租表」は、その一部が454~430/29BCにわたって残っており、同盟諸都市の貢租負担の度合いが確認可能である。貢租は当初船舶かそれぞれの通貨で納められていたが、金庫が移転した後、幾つかの例外を除き、アテナイ通貨で支払われるようになった。さらに戦争後半の413BCからは代わって5%の港湾税が同盟諸都市に課せられ、税金分が貢租となって徴収された。

アテナイ通貨による支払いは、アテナイ銀貨の増産を促し、ペロポネソス戦争期間（図2のように）生産が倍増し、戦費調達に貢献したことが窺える。478~445BCの間に同盟都市の50%は鑄造を停止し、445BCまでには（小銭を除いた）通貨鑄造を行った都市は20%にまで低下した²⁹⁾。アテナイ通貨の通用力は、海上同盟を超えて広域に影響を与えシリア、エジプトではその模倣通貨が鑄造され、とくに413BC以降アテナイ通貨の

29) Figueira (1998: 58-91). ただし、アイギナは430BCまで鑄造し、キオスとサモスは貢租金をもともと納めず、またイオニア [小アジア北西部] やヘレポントス諸都市では在地の局地通貨を鑄造し続けていた。von Reden (2010: 75)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に供給が低下する中で、ペルシャ国王やそのサトラップがスパルタ艦隊の水夫の支払い向けに鑄造し使用するようになっていた³⁰⁾。その関連で、アテナイ貨幣統一令が同盟都市向けに445~413BCの間に発布され、「すべてのメンバーはエレクトロン貨の使用者を除き、自身の銀貨を生産することを禁じ、代わりにアテナイ銀貨を使用しなければならず、旧貨はアテナイへ運び再鑄造される」という内容であったとされている³¹⁾。しかしながら、445BCまでには多くの鑄造所が閉鎖されたが、突然の停止や消滅はなく、この時点ではアテナイ通貨の強制力はなかったのではないかと推測されている。統一令の発布が何時であったかについては論争があり、大きく40年代と20年代に分かれて推定されていたが、統一令の石碑の字体の研究等により20年代相当、つまり戦争の後半に出されたという見解が有力になっている³²⁾。戦費の調達と管理の上で通貨統一の必要性が高まったという事情が大きな要因であったろうと解釈されている。

フィゲイラは、統一令が前半の40年代に出され、その趣旨は同盟諸都市自身の利益に沿うように、アテナイ通貨を強制するより局地通貨と共存し融合するところにあったと主張したのであるが、彼のテキスト解釈と時期推定については否定的な見方が強くなっている。しかしながら、前5世紀半ばですでにアテナイ通貨は人気があり、強制的使用は必要でなかったという彼の指摘は、統一令が20年代になって当時の戦争事情から発布されたであろうことで矛盾せず、アテナイ通貨が早い時点で国際通貨としての信用をえて、その後も継続したことは、統一令の時期とは関係なく、信用という貨幣の本質的条件から理解可能である³³⁾。通貨に対するアテナイ人の姿勢は、ペロポネソス戦争後しばらくして375/4BCに発布された二

30) Kraay (1976: 73-74), Figueira (1998: 530-34).

31) Howgego (1995: 44-46), Figueira (1998: 319-413), Mattingly (1999).

32) 伊藤 (1981: 245-47, n. 2) の展望を参照。直近の動向については Hadji and Kontes (2005), Rhodes (2008) を参照。

33) Figueira (1998: 392-410), von Reden (2010: 77-78).

コフォン法にも表れている。戦後の通貨不足の中で通貨の品質低下と偽造貨幣が出現するようになり、その状況下でアテナイ政府は持ち込まれた通貨の品質維持とその流通を貨幣検査と銀行家を通じ保証しようとした。市場における通貨の信頼性を保持することにより取引費用を減らして取引を容易にする方策がたてられたことが窺えるのである。

2.3 アテナイ経済と国家財政

交易と貨幣から第3の要素となる国家財政に目を向けてみよう。その意図は、先に述べたように、交易という交換の領域とそれを媒介する貨幣が存在すれば、自ずと資金循環の構図がアテナイを中心としたエーゲ海域全体に成立するようになるどころにあり、その循環を成立させる残りの(貨幣を発行する)部分として国家財政が登場するからである。

表3に、アテナイ国家にかかわる財政指標(貢租金、政府収入、準備金)が載せてある。貢租金はデロス海上同盟結成により同盟都市からアテナイの金庫に納められた資金である。500タラントンのという基本的金額が予定されていたとはいえ、実際はそれ以下の金額が30年代まで納められていたのであり、431BCにペロポネソス戦争が勃発すると、順次(強制的に)貢租の金額が上昇していった。それに合わせて、金庫に蓄積された準備金は増加していき、30年代のペリクレスの公共事業によりその取り崩しが行われ、428BCには6,000タラントンの減っていたことが窺える。その後、戦費中心に支出が増えていき、412BCには準備金は底をついてしまっていた。この期間、収入は貢租金も含めて戦争直前では1,000タラントンほどであり、パークによれば貢租金その他でおよそ600タラントン、アテナイ国家固有の収入が400タラントンほどであった³⁴⁾。戦争中は各種の増税と寄付等により政府収入は2,000タラントンのまで増加したが、準備金が枯渇していったことから、戦費その他支出は収入以上であった。財政

34) Burke (2010)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

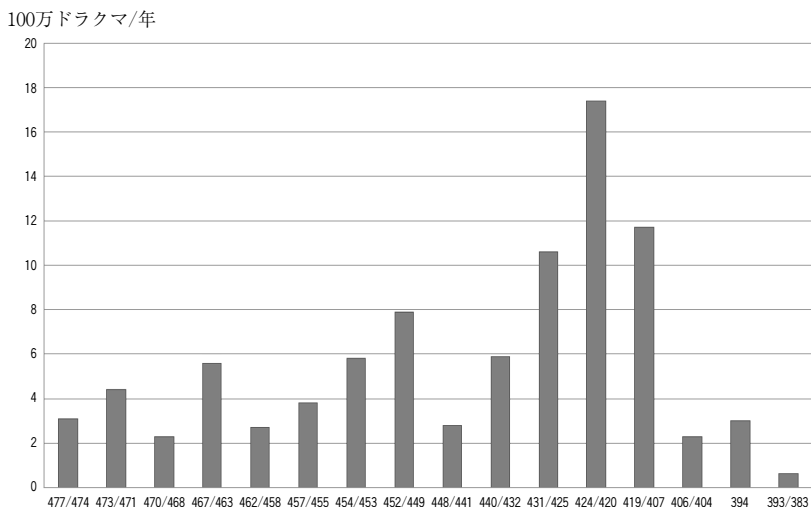
表3 アテナイ政府収支 (単位：タラント)

BC	貢租	収入	準備金	備考
454	500			Meiggs (1972: 253, 325)
454-33	370			Andreades (1933: 309)
437 以前			9,700	Andreades (1933: 321)
431	600	1,000		Thuc. II. 13.3, Xen. <i>Anab.</i> 7.1.27
428	800		6,000	Meiggs (1972: 325), Thuc. II. 13.3
425	1,500			Meiggs (1972: 325)
422		2,000		Aristophanes <i>Wasp.</i> 655-63
421	1,200			Andro. III. 9
420			7,000	Andreades(1933:321)
412			0	Aristophanes <i>Frog II.</i> 725-26
405-378	廃止			
377-57	200-350			Andreades (1933: 314)
355		130		Dem. X. 37-38
357-38	46-60			Andreades (1933: 314)
340		400		Dem. X. 37-38
ca.338		600		Plut. <i>Vit. Lyc.</i> 脚注参照
ca.326		1,200		Plut. <i>Vit. Lyc.</i>

赤字の事情は、この時期の銀貨発行量の突出ぶり (図2) からもうかがえる。

戦争後、アッティカ地域内の耕地荒廃とラウリオン銀山の採掘停止などにより、収入は激減し、支出の大幅な削減を余儀なくされた。デロス海上同盟解体とともに貢租制度は廃止され、その後第2次海上同盟が結成されて、貢租金としてではなく安全保障上の自主的な貢献分として資金が再びアテナイに流入し、スパルタの勢力衰退と同時にアテナイの地位が向上すると、貢献分は強制的なものに変わり、その金額もふえていったが、同盟市戦争 (357-55BC) により同盟が再び解体して、その後は資金の流入分は大幅に減少した。政府収入は、おそらく前4世紀前半には大きく落ち込んでいたと推定され、355BCで130タラント、その後エウブロースの改革を経て340BCには旧に復して400タラントの正常収入に回復した。

図2 年間アッテカ・ドラクマ銀貨発行量



注) Sverdvup and Schlyter (2012) より作図

カイロネイアの戦い (338BC) の直前には、おそらく 600 タラントンまで増え³⁵⁾、その後リュクルゴスの改革を通じて銀山収入や中継交易関連の収入を増やして 2 倍の 1,200 タラントンまでの規模に達したとされる。

要約すると前 4 世紀の財政事情は、前半が銀山経営の低迷と銀貨発行の低水準、海上同盟解体と貢租廃止により、大幅な減収 (おそらく 355BC と同水準) が発生したと推定され、第 2 次海上同盟の実質貢租復活により、収入は 300~500 タラントンに増加したと考えられる。その後の同盟解体により大減収となるが、ラウリオン銀山の再開発が軌道に乗って再度 400 タラントンの収入に戻り、リュクルゴス改革を通じてカイロネイア後のアテナイは通商国家へ転換を図り、1,200 タラントンの収入を確保す

35) Plut. Vit. Lyc. 60 タラントンを 600 タラントンの誤記とする見解については *The Speech against Leocrates, Lycurgus*, edited by A. Petrie, p.xviii, n. 3 を参照。さらに Thirlwall (1840: 142) も参照された。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
るに至ったが、ヘレニズム期になるとマケドニアとの対立の中で、アテナ
イの地位は順次低下し、同調するように人口と政府収入も低下していった。

以下ではこのような前5世紀戦争直前と前4世紀の政治情勢をふまえて、
雨宮 (Amemiya 2007) によるアテナイ経済モデルを使って、当時の経済状
況を推定していくことにしたい。雨宮経済モデルの特徴は、成員が農民層、
富裕層、(製造業、サービス、交易に従事する) 都市住民層に分けられ、政府
部門と外国貿易部門が加わって、アテナイ経済を構成する形になっている。

各部門は、農産物、(サービス、交易を含めた) 製造物からの収入と製造
部門に従事する労働者・奴隷に分配される賃金と国家から支給される役職
手当があり、富裕層においては所有する工房や船舶、事業者・商人への貸
付からの収益がある。他方、支出としては、穀物や食料、その他の支出が
あり、家事・事業、鉱山向け奴隷や原材料の購入があり、租税・寄付負担
などがある。国家は、貢租金や収奪・没収などの資金のほかに、在留外人
税、奴隷税、関税、市場税などの税収と鉱山開発の請負・手数料などの収
入があり、役職、兵士、三段櫂船給付、公共事業、祭祀関係などの支出が
ある。それぞれの部門の収支が黒字である場合、貨幣(銀貨)の留保分と
なり蓄積に回ることになり、また国内の財・サービスの需給の差額は、外
国との交易(輸出・輸入)分となり、貿易収支を形成する。

次のアテナイ貿易収支表(表4)は、ペロポネソス戦争以前(433/2BC
頃)とカイロネイアの戦い直後(338/7BC頃)を想定して、上記の経済モ
デルから推定して導出されたものである。戦争直前までの前430年代の物
価は、前4世紀に比べて低く、およそ2/3であったと想定しているため、
輸出入金額は前4世紀後半に比べて大きくなっていない。また前4世紀半
ばに想定された雨宮氏の国際分業(製造物その他支出の輸出と輸入)の設定
より前5世紀後半は国際分業度が低かったと想定したため、その製造物等
の輸出と輸入の金額はより小さな規模になっている。全体として、433/2
BCと338/7BCの外国貿易額上の差異はさほど大きくならなかったが、

表4 アテナイ貿易収支

単位：タラントン

ca. 433/32BC				ca. 339/38BC			
輸出		輸入		輸出		輸入	
貢租金	500	穀物	671	分担金	60	穀物	612
銀	762	食料	695	銀	825	食料	637
農産物	67	製造物	303	農産物	100	製造物	345
製造物	1,374	奴隷	177	製造物	1,466	奴隷	131
		原材料	857			原材料	700
計	2,703		2,703	計	2,451	その他	26
							2,451

注) ca.339/38 は Amemiya (2007: 110) の分担金を修正して表示。
ca.433/32 は筆者推計。

前5世紀戦争直前の物価水準を低く見積もったことから、その実質輸出入は相対的に大きくなっていることには留意されたい。

この経済モデルから導かれた2つの時期の貿易収支の内容は、ある面で似ており、別の面で異なっている。相似点は、生活上不可欠な穀物・食料の輸入と原材料輸入を賄うために、銀貨と（サービス、商業を含めた）製造物の輸出が不可欠になっていたことであり、他方異なる点は分担金（貢租金）の多寡である。第1次海上同盟の結成と解体は、アテナイに非交易ルート資金流入をもたらし、これが国内の公共事業のみならず準備金の蓄積と戦費の調達を容易にしていた。戦後の同盟解体と銀山経営の停滞ならびに戦乱による耕地の荒廃という状況下では、穀物・食料の輸入の制限をせざるをえなく、人口減少と低迷を前4世紀初めには余儀なくせざるを得なかったであろう³⁶⁾。それでも製造業・金融・交易部門の存在は制限されながらも穀物調達に貢献したであろうと推察される。実際、アテナイは消費都市のみならず生産都市でもあったことが指摘され、非農業部門の経済活動は多岐にわたり、古典期には170もの職種が存在していたことが確認

36) その他の食料やその他支出は本来需要する水準より3割以上削減せざるを得なかったと推定される。付録参照。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心にされている³⁷⁾。前4世紀後半に第2次海上同盟が崩壊したのち、エウブ羅斯による改革で、鉱山経営の復活のみならず、マケドニアによるヘレポントス航路への圧力が高まる中で、ペイライエウスの港湾設備や外国人の海上貸付訴訟制度の整備などにより、再輸出を含めた交易規模の大幅な拡大を実現して収入の増加を確保するに至ったといわれる。さらにカイロネイアの戦い後、リュクルゴス政権下で政府収入が3倍増になったとされ、再輸出向け輸入分に絡めて関税や倉庫保管料を確保し、関税・市場税、船舶の賃貸などを強化することにより政府収入の増加を図り、支出を増やす原資を確保したとされるのである³⁸⁾。

古典期におけるアテナイを中心としたエーゲ海域の交易ネットワークを上記の経済モデルから推計された貿易収支表から再度眺めてみることにしよう。共通して見られたことは、アテナイに必要とされる穀物、食料、その他の物品ならびに原材料を購入するのに必要な資金を、アテナイ国家では銀貨支払いと製造物輸出により調達するという構図が継続して成立していたことである。アテナイ帝国が成立していた時期には、同盟都市からの貢租金の流入があったのであるが、それがなくなったとしても原材料を輸入して（サービス、商業を含めた）製造物を輸出する枠組みはなくならなかったと推定されることであり、残りは一部銀貨発行により、他は貢租の形で埋め合わされてきたということである。

海上同盟が成立していた前5世紀後半において、同盟諸都市は貢租納入のため絶えず銀貨（それもアテナイ銀貨）を調達する必要に迫られていたのであり、アテナイへの農産物や原材料の輸出、もしくは（黒海、エジプト、シチリアなどの）穀倉地帯へワイン、オイル、野菜等を輸出して穀物を手しアテナイに運ぶことにより資金調達を確保していた³⁹⁾。すでにふれた

37) Harris (2008: 68-69). さらにアテナイにおける製造業（陶器、金属加工、織物・衣服、木材加工・造船、建設、食料・化粧品など）の詳細については Acton (2014) を参照。

38) Hopper (1979: 107), Burke (1985).

ように、原材料となる特産物を有した都市・地域は、それらをアテナイに持ち込み、資金を獲得するという交易の枠組みにおかれるとともに、貿易収支表からいえることは、平均すると交易代金の一部はアテナイの市場を利用して種々の製造物を購入することによりアテナイに還流していたことであり、その規模は輸入総額の50~60%に及んでいた。それらの流れを裏付けていたのが、大量に発行された銀貨であり、交易の支払いに使われ、アテナイから流出していったが、5世紀後半の体制では全体の2割弱が貢租の形でアテナイに還流し、アテナイ国家の支出拡大を支えていた。この海上同盟が解体し、貢租ないし貢献分の流入が無くなっても、前4世紀後半の銀山経営再開による銀貨の供給が大きく増加することにより、アテナイは交易活動の活性化を図ることができた。この2つ時期において、アテナイ銀貨の大量発行と交易による銀貨の拡散は、アテナイ銀貨を国際通貨へと進化させたわけであり、域内の貨幣経済化を大きく進展させたといえる。その際、前5世紀後半に成立したアテナイ帝国下における貢租という非交易ルートが存在は、アテナイを中心とした強制的な資金循環を形成させたという意味で、アテナイ銀貨が国際通貨になるためのもうひとつの要件であったといえよう。一度獲得されたアテナイ銀貨の信用力は、戦争後の窮乏期（貨幣不足の時代）のアテナイにあっても国際通貨としての信認を継続させたのであり、ニコフォン法の成立はその信用を維持するための方策であったといえる。

前4世紀前半は、この意味でアテナイにとって試練の時期であったわけで、銀山経営の停滞と貢租の廃止は、交易を継続し人口を維持するための

39) エーゲ海周辺の地域の特産物がアテナイ一か所に集まっていたことは *Ps. Xen. AP 2.7* で記述されている。さらに432BCまでには、アテナイはエーゲ海を「閉じられた海 (closed sea)」に換えてしまい、必要物資の輸入と全商品の流通を同盟諸都市間で規制する能力をもつようになっていたという (Garland 1987: 28)。またアテナイ帝国下における「閉じられた海」の形成と維持がヘレポントス管理官 (*Hellespontophylakes*) や諸都市に派遣されたアテナイ人役人に負っていたことについては Finely (1978: 11-20) を参照。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に基盤を失うことになりかねず、文献上の乏しさにより肯定的な見解はみられないようであるが、非農業部門の輸出による貢献はこの窮乏期にあつて不可欠となり、この時期を乗り越えアテナイが再度海上同盟を結成するに至ったことはその貢献の存在を間接的ながらも証明していたといえよう。とりわけ、文献上この時期から銀行家の活躍が目立ってくる。銀行家の多くが交易に関与し、ペイライエウス港周辺で活躍していたことを考慮に入れば、この時期の非農業部門の輸出貢献分の中で、「見えざる貿易 (invisible trade)」と呼ばれる交易に関わるサービス、すなわち、運輸、船舶修繕、海上貸付、両替、市場売買と保管などから得られる収入がかなりの程度占めていたのではなかろうか。それは、アテナイ（ペイライエウス）がエーゲ海域の交易の中心地であり、中継交易地であり続けたことを意味している⁴⁰⁾。

2.4 金融仲介者（銀行家）

前5世紀のアテナイを中心にした経済循環体系は、すでに述べたように、貢租金、銀貨輸出、ならびに穀物・原材料の輸入と主要製品・サービスの輸出からなる交易活動によって成立していた。海上同盟の諸都市からの貢租金の還流とラウリオン銀山からの銀採掘、ならびに国内製品輸出と交易活動による利益によって得られた資金を使い、過大ともいえる人口を養うのに必要な食料と原材料を獲得していた。その点で交易活動はアテナイの経済を維持するうえで不可欠であったのであるが、その担い手はもっぱら私的商人の手に委ねられていたのであり、国家としての役割は、交易航路の安全を保障するところであり、その点で海軍力の維持が必要であった。

40) ペイライエウス港については次の記述がある。「[ペイライエウスのエンポリオン] は遅くとも前4世紀まで、おそらくペロポネソス戦争勃発時にすでに、多くのギリシア都市国家にとって主要な交易センター (entrepôt) になっていたものであり、供給地と直接取引するよりペイライエウスに船を向ける方がより便利になっていた」(Garland 1987: 85)。

それら商人たちは貧困市民もしくは在留外人や外人によって構成されることが多く、比較的富裕なアテナイ市民が交易事業に関与する場合は、資金の出し手として代理人などを同行させる出資型（パートナーシップ）の形態をとることが多かったとされている⁴¹⁾。アテナイ帝国の下では、私的商人たちは遠方からの交易に従事しても、その交易港であるペイライエウスに穀物や資材を比較的 safely に持ち込むことができ、またそこで必要な資材・製品を購入するか銀貨をえることができるので、彼らにとってアテナイむけの交易活動は比較的利益の上がる事業であった⁴²⁾。

当時のエーゲ海域はアテナイ銀貨が国際通貨の地位を固めてきたとはいえ、局地的な通貨圏が健在であった時期であり、交易拠点であるペイライエウスには多くの商人たちが来航して資材と共に貨幣を持ち込み、交易をおこなうために両替や他の金融サービスをもとめたであろう。両替商の名は前5世紀半ばに現れ、銀行家の方は前4世紀になると頻繁に現れてくる⁴³⁾。銀行家の前身はおそらく両替商であり、当初は交易拠点において商人向けに両替を引き受けながら、資金保管（預金）、受取・支払い、証人、保証人引き受けなどの交易活動に必要なサービスに拡大していき、最終的には貸付にまで至ったと考えられる⁴⁴⁾。

交易事業は、とくに遠距離交易になると、利益があるとはいえ航路上の安全性と交易相手との関係性の点から危険のともなう事業となり、単なる両替（と資金の管理）を生業とした金融業者には関与する対象となりにくい。そのような交易対象の融資には、海外物資を必要とする資金力のある市民が商人・船主と組んで出資し共同で交易をおこなう *ekdosis* と呼ばれ

41) 前沢 (1977b: 139), 伊藤 (1981: 221).

42) Garnsey (1988: 132). イソクラテスやクセノフォンはペイライエウス港がヘラス（ギリシャ世界）の中心であり、すべての物品が揃い、往路の積荷に見返りに銀を含めて商人が欲しがる商品を復路に購入することができるとして、市場としての魅力を述べている。Isoc. 4.42, Xen. Vect. 3.2

43) Bogaert (1968: 61, 63)

44) Isager and Hansen (1975: 90-95)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
る出資形態が支配的であったであろうといわれる⁴⁵⁾。銀行家の活躍がペロ
ポネソス戦争後に顕著になるとすれば、前5世紀におけるペライエウス
での活発な交易活動は、一方では交易拠点 (*emporion*) での両替を中心にし
た金融仲介者の活動と、他方では事業出資の形で有力市民から商人たちに
資金を出資する融資活動に二極化させたのではないかと考えられる。そし
てこの二極化を変容させたのが、ペロポネソス戦争後（前4世紀前半）の
政治、経済情勢の変化であったと考えられるのである⁴⁶⁾。

ペロポネソス戦争後、人口がほぼ半減するほどアテナイは低迷状態にな
ったのであるが⁴⁷⁾、コリントス戦争を経て前390年代末には黒海への航路
を再度確保し、その後大王の和約を経て、前377年には第二次海上同盟を
結成して、スパルタの勢力を後退させエーゲ海域の安全保障を確立するに
至る。前371年にはレウクトラの戦いでテーベがスパルタを破りその台頭
を許すことになるが、前362年のマンティネイアの戦いでテーベは敗れて
衰退し、他方アテナイはその帝国主義的な姿勢を再度強めていった結果、
同盟都市の反感を買い、ついには同盟市戦争が起こって前355年第二次海
上同盟は解体した⁴⁸⁾。興味深いことには、これら国際情勢の変化の時期
（前391年、371年、355年）に対応して、銀行家たちの世代交代が生じてい
たことである⁴⁹⁾。

ペロポネソス戦争後の10年ほどは、アテナイは人口半減とスパルタに
よる制海権の把握によりきわめて困難な状態にあったと考えられる。貢租
金や鉱山収入の喪失の中で海外からの必要物資は、制約されていたとはい

45) 前沢 (1977a, 1977b)

46) エルクスレーベンによれば、前5世紀中葉にいたる海上交易の担い手はアテ
ナイ市民であったが、後半になると商業活動は外人の手に移行する。4世紀
半ばになると出資者・商人ともに外人の比率が上昇してくるという。Erxle-
ben (1974: 472-73) さらに伊藤 (1981: 221) 参照。

47) Strauss (2014: 86)

48) Garnsey (1988: 134), Burke (1990).

49) Bogaert (1968: 86-88)

え交易でしか確保ができなかったであろう。第1世代の銀行家たちは、そのような困難な状況下で依然として中心的な中継交易港であったペイライエウスの中で活躍していたものと推定される。90年代末からの黒海航路確保とともにボスポラス王国からの穀物などが継続的に輸入されると、ビザンティオン、ミュティレネ、キオスなどのトルコ側海岸の同盟諸都市との間にネットワークが復活する⁵⁰⁾。それと同時に、第二世代の銀行家が活躍するようになる。

パシオンは其中で最も有名で成功した銀行家であるが、彼の活動はペイライエウスでの商人たち (*emporoi*) への金融サービスだけでなく、エーゲ海内で同業者との交流関係を築き、彼自身ないし代理人を派遣して顧客との案件を処理するなどして信用上のネットワークを形成して、ギリシア商人たちの信頼をかち得たといわれる⁵¹⁾。ペイライエウスに来航する商人たちはパシオンの銀行に口座を作ったとされ、その信頼と口座に預けられた資金の一部を商人たちに担保をとりながら海上貸付を行っていたであろうことは十分考えられる。前370/69年に死去する際に、不動産や家屋・家具、工房などの他に39タラントンの債権を残していたとされ、莫大な財産形成には在留外人として活躍した銀行家時代に海上貸付のようなハイリターンの海上貸付が多様な相手を対象に行われていたと考えてもおかしくはない⁵²⁾。この第2世代の銀行家はおそらく幅広く貸付を行っていたと考えられる。前371年にレウクトラでテーベがスパルタに勝利する時期、

50) Burke (1990)

51) Dem. 50.18, 56, 52.3, 8, Isoc 17.19.

52) 銀行と海上貸し付けについては、否定的な立場に Bogaert (1965, 1968: 355-56), Millett (1991: 188-98), 肯定的立場には Erxleben (1974: 490-92), Thompson (1979: 232-37), Cohen (1992: 171-83) がそれぞれあげられるが、主な収益源として海上貸付以外の貸出利息 (Bogaert 1968: 357-58, 1986: 19-24), 海上貸付利息 (Cohen 1992: 114-15), 金融サービス収入 (Thompson 1979: 239-240), 両替手数料 (Millett 1991: 216-17) をあげておりさまざまである。伊藤 (1981: 224-25) も肯定的であり「日常接触の機会の多い銀行から海上交易商人たちが出資を受ける可能性は、かなり高かった」と述べている。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に幾人もの銀行家の破産が生じていた。テーベの脅威がアッティカに及ぶものとして取り付け騒ぎが起きたのではないかと推測されている。

前360年代はテーベが勢力を誇った時期であるが、アッティカの投資家にとっては鉱山のような地上の物件については及び腰である一方で、海上同盟による交易の安定性が強化されたところから海上交易は利益ある投資対象であったに違いない⁵³⁾。パシオン銀行の後継者であるフォルミオンは銀行業務のみならず、船舶を所有して交易業務に関与していたとされ、いわば商人的銀行家の如き活動をしていた可能性がある。同盟市戦争によりビザンティオンが離反した後、フォルミオンの船が抑留の状態になり、その案件処理のため代理人を派遣したとされている⁵⁴⁾。フォルミオンを含んだ第3世代の銀行家は、流動的な政治情勢の中にありながらも強化された海上同盟の下で交易が活発化していくという環境の中で銀行活動を行っていたが、海上同盟の破綻というインパクトを受けて、次の第4世代にバトタッチしていったものと思われる。

第4世代の銀行家は海上同盟破綻後前320年代までの極めて活発な交易活動の期間に活躍した人々に対応する。前4世紀後半になると海上貸付の事例が数多くみられ、銀行家周辺では在留外人や外国商人の間で交易向けの貸し付けが頻繁に行われたことが窺われる。実際、商人や船主 (*naukleros*) 向けに同業者や市民が資金を貸し付けたり、仲介者となって出資者を集めたりしており、銀行家も仲介者や保証人として行動するだけでなく、担保を取りながら貸し付けを行っていた。

この時期は、アテナイが海上同盟解体により同盟都市からの資金 (貢献 *syntaxis*) が流入しなくなった結果、代替策として海上交易の振興とラウリオン銀山再開発などにより政府歳入を増加させる方策が講じられたエウブーロスやリュクルゴスの改革時期に対応していたのであり、40年代のマ

53) Hopper (1953: 293, 251), Burke (1990), Jansen (2007: 364-66).

54) Dem. 45.64. 船舶所有の可否については伊藤 (1981: 222-23) を参照。

ケドニアへの対抗とカイロネイア後の協調の中で、結果的に海上交易が活性化し、すでに述べられたように30年代以降のリュクルゴス時代には政府収入が3倍にも増えており、その主因としてペイライエウス港を中心に交易がきわめて活発化したことによる収入の増加があげられている⁵⁵⁾。これにはヘレニズム時代夜明けの貨幣膨張と東地中海の交易活性化が大きく関わっていたことが考えられ、第4世代の銀行家の活躍は、このような政治・経済情勢の展開をも背景にしていたのである。

3. ヘレニズム期：エジプトとローマ

3.1 東地中海交易の展開

334BC から始まったアレクサンドロス3世(大王)の東征以降、10年余の間にペルシャ帝国が倒され、その領土を引き継ぐ形で大帝国が形成された。323BC に大王が没すると後継者戦争が長期にわたり継続し、紀元前3世紀初めにはマケドニア王国、セレウコス王国、プトレマイオス朝エジプト王国が成立し、小アジアの王国を含めてこれら王国は、前2世紀半ばにローマが台頭してくるまでヘレニズム期前期の政治・経済体制を形作っていた。その体制は、それ以前の古典期に比べて、東地中海全域にギリシア文化を浸透させており、交易、貨幣、政治、文化面において共有された広域(ヘレニズム)世界が形成されるにいたった。古典期のエーゲ海周辺を中心にした都市国家群に比べて、ヘレニズム期では先に述べた3つの国家とアナトリアの小王国が加わり、相互に対立していたとはいえ、交易面とまた貨幣供給の面で、そしてギリシア人の大量の移動(移民)の面で、それ以前とは比べようもない規模で大変動が起きていたのである。

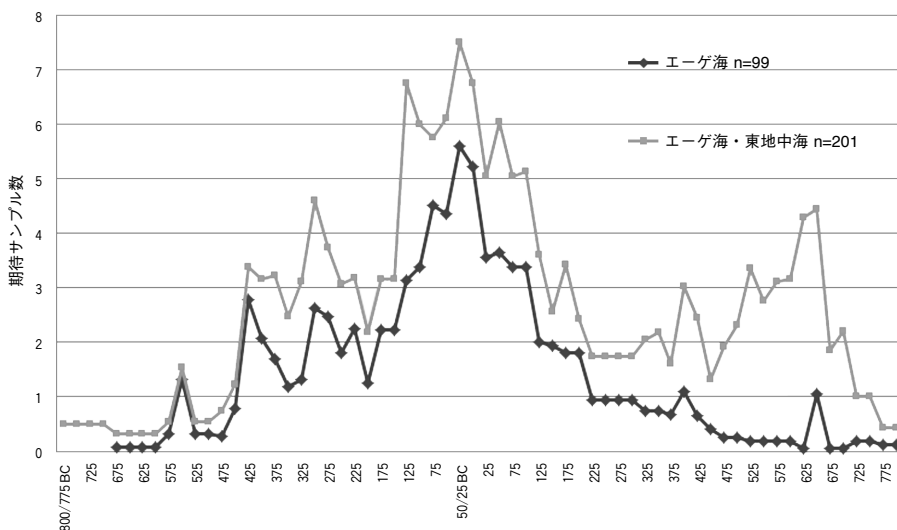
交易は、その活動領域の拡大により質量ともに活性化していった。その結果、交易の中心地(中継港)はアテナイ/ペイライエウスからロードス島に移っていき、交易の流れは大きく変わっていった。ロードスはその海

55) Burke (1984, 1985, 1990)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に軍力を保持することにより、アテナイに代わって制海権を獲得し、海賊退治などにより航海の安全を保障し、その中継港としての地位を保持していた⁵⁶⁾。この体制は前2世紀前半に発生したマケドニア戦争により崩れ、その後デロス島が自由港になることにより交易の中心はそちらに移っていった。

その主題となるべき交易活動の内容であるが、全体像を把握するのはなかなか困難を伴う。しかしながら、幾つかの分野のサンプルを抽出することにより、その活動の一端を探ることは可能である。ひとつは、難破船の時期別分布である。次の図3は地中海における難破船データベースからエーゲ海・東地中海の部分抽出しグラフ化したものである⁵⁷⁾。これによれば、紀元前3世紀から紀元1世紀前半にむけて難破船の数が大きく増えて

図3 難破船：エーゲ海・東地中海



注) Strauss (2013) : 難破船推定期間を一様に分布するものとして期待サンプル数を計算している。

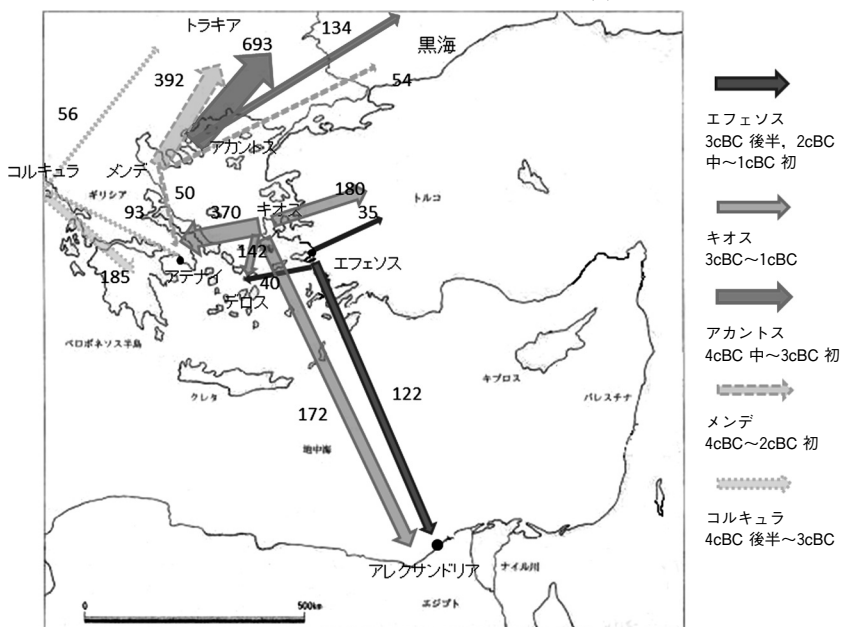
56) Gabrielsen (1997: 43-46, 100-11)

57) Strauss (2013)

おり、それを交易活動の代理指数とみなせば、船舶の大型化という傾向も加味して、交易活動がヘレニズム期に東地中海においても大きく活性化していたことが窺われる。

もうひとつの指標は、アンフォラという容器(陶器)の出土分布である。図4と図5は、エーゲ海の主要なワイン産地から主要な輸出先への動きを、出土地のアンフォラを産地別に分類することにより推定したものである。メンデやアカントス、タソスといったエーゲ海北部の産地からのアンフォラの動きは、前4世紀(古典期)から前3世紀にまたがった期間に累計された出土数を表したものであり、近隣のトラキアや黒海むけの動きが顕著であったことを窺わせる。キオス、クニドス、コス、ロードスといったブランド化したワインの産地からの動きは、アテナイ、アレクサンドリアむ

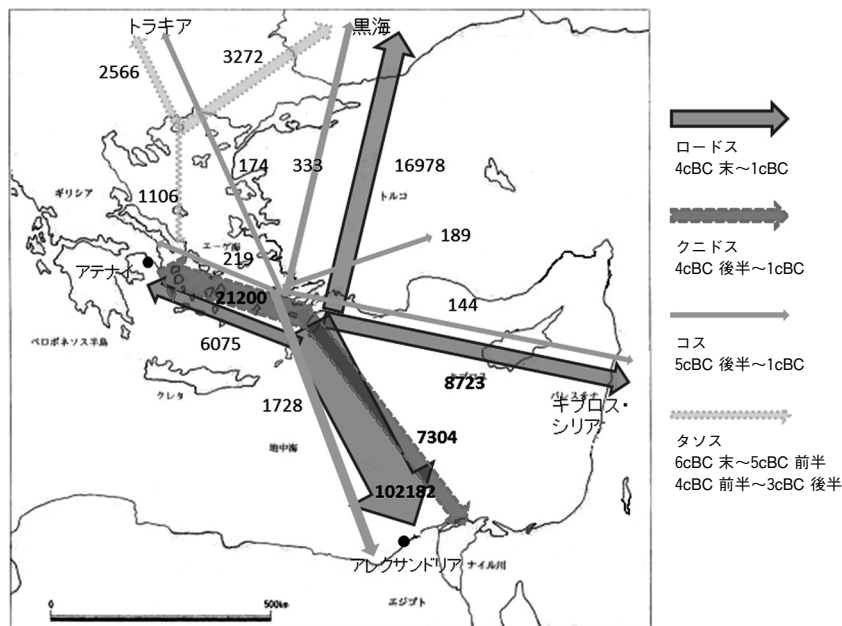
図4 アンフォラ出土先からみた交易図(1)



注) Panagou (2016: table 9.4) から作図。数値は出土数を表す。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
 けが顕著であり、とくにクニドスからアテナイむけの動きが著しく、他方、
 ロードス産アンフォラは出土規模が非常に大きく、とりわけアレクサンド
 リアむけはその出土数からも桁外れになっている。そのロードス産アンフ
 オラの時間的推移を追っていったグラフが図6である。前3世紀にはいり、
 その数を大きく増加させ、前2世紀半ば以降減少に転じて、前1世紀前後
 には大きく減少していた。図5からアレクサンドリアむけの出土数は10
 万を超えているとされているが、その多くは未整理のままであるため、図
 6には反映されていない⁵⁸⁾。一部の地区からの出土に限定して、その推移

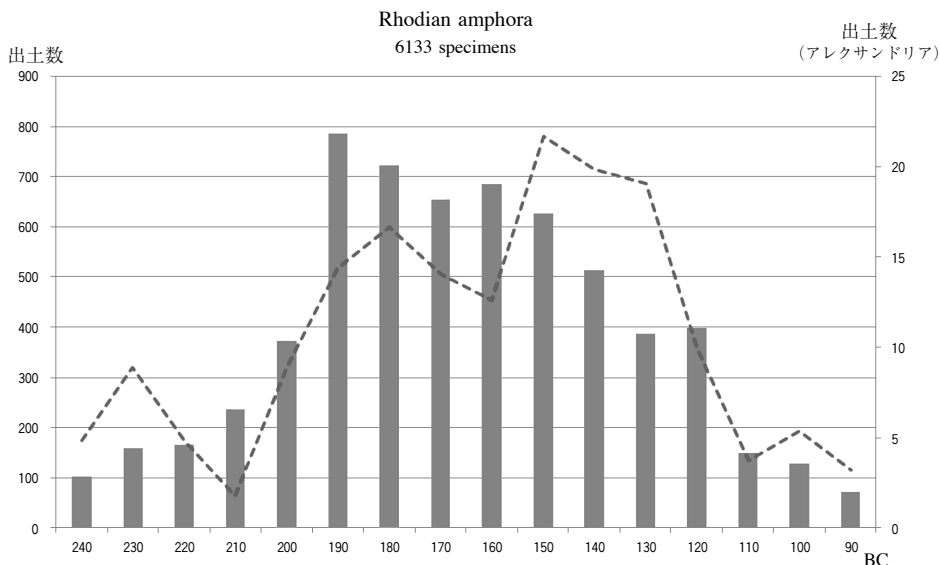
図5 アンフォラ出土先からみた交易図 (2)



注) Panagou (2016: table 9.5) から作図。数値は出土数を表す。

58) グレコ・ローマン博物館 (アレクサンドリア) にアレクサンドリア発掘のスタンプ付きのアンフォラの把手 (handles) が15万個以上保有されており、その内2/3がロードス産と推定されている (Empereur 1998: 398)。同じく把手から産出地と年代を推定したグレースの先行研究 (Grace 1985: 42) があり、

図6 ロードス・アンフォラ出土推移図



注) Lund (2011: Fig. 13.3, 13.4)

が図6の点線グラフで図示されており、それによれば前2世紀後半の動きが全体の動きとずれており、これはデロス自由港化の影響を受けてロードス産アンフォラがアレクサンドリアむけに大きくシフトした状況を反映しているのではないかと推測されている⁵⁹⁾。またアレクサンドリアのみならずエジプト各地でロードス産アンフォラが時期的に集中して出土しており、エジプトにおける海外ワインの需要の所在を投影していたといわれる⁶⁰⁾。

ベナキ・コレクションおよそ18,000個の把手のうち68%がロードス産であり、第Ⅱ期(240-205BC)の年平均個数が34、第Ⅲ期(205-175BC)70、第Ⅳ期(175-146BC)78、第Ⅴ期(146-88BC)227、第Ⅵ期(108-88BC)163であり、第Ⅴ期、第Ⅵ期にロードス産アンフォラの輸出が増加したことが窺える。ロードス産アンフォラの地域・時代別分布についてはさらにRauh (1999: 166-68, Fig. 2)を参照されたい。

59) Lund (2011)

60) 周藤 (2014: 331-45, 2016)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心にロードス産ワインの見返りにロードス商人たちによってエジプト（ならびに黒海）から運ばれ、エーゲ海の顧客に売られたのが穀物であった。図5からも推察されるように、ロードスはエジプト、黒海、そしてシチリアも含めてエーゲ海地域に穀物を供給する中継基地でもあった⁶¹⁾。

紀元前2世紀後半になると、ローマが台頭してくる状況に呼応するように、イタリア商人の存在が東地中海域において顕著になってくる。とくに第3次マケドニア戦争(171-168BC)後、デロス島がアテナイ領有になり、実質自由港化してイタリアとの交易が活発化し、デロス島ならびにその他都市にイタリア商人（と他地域の商人）が滞在・居住するようになった。この時期以降イタリアとの交易が活発した様子は、例えばイタリアン・アンフォラの出土数の推移からも窺える。lundによれば、160BC頃を境に出土数が急激に増加し、140~40BCまで20年ごとにほぼ300前後の出土を記録している⁶²⁾。イタリア人はデロスのみならず、アテナイやエフェソスにも居住することになるが、エフェソスは100BC頃では、出土したアンフォラは在地産や（ロードス、クニドス、コスなど）近隣産が大半を占めていたのに対し、50BC頃では分布が大きく変わり、イタリア産が36%も占めるようになっていた⁶³⁾。イタリア産アンフォラはワインやオリーブ油用の容器として使われ、滞在していたイタリア商人の消費需要に対応したものと解釈されていたが、クニドスやコス産ワインがブランドものとしてイタリアで重宝されるようになった動きに対応して、比較的安価なイタリア産ワインが前1世紀になるとエジプトなど大量消費地向けにロードス産にとって換わっていったと解釈することもできる⁶⁴⁾。これらの前2世紀

61) Casson (1954), Belthold (2009: 51-53).

62) Lund (2000: Fig. 10). ウィルによれば3,000ものイタリア・アンフォラ一覧表のなかで40%がアレクサンドリア発掘であり、24%がデロス、21%がアテナイからのものであった (Will 1997: 110).

63) Lawall (2005: 205)

64) イタリア人居住者むけ消費については Rostovtzeff (1941: 1254), Rauh (1999: 169)を参照。威信、価格、品質からワイン需要を説明する見方については

後半以降の交易の流れの変容は、難破船数の増加から示唆されるマクロ経済的な上昇傾向と政治的影響の変化を合わせて読み取られるべきであることを示唆している。

3.2 貨幣

ヘレニズム期前期の貨幣供給は圧倒的な規模であったといわなければならない。これが東地中海交易の活性化につながるのであるが、供給の第一因は交易より王国の統治目的にあり、領域国家内の租税徴収と政府支出の有効化にあったというべきである。貨幣供給量の推定は硬貨そのものの推定より、比較的残りやすい、硬貨を打刻する打ち型 (dies) の推計を通じて行われてきた。ヘレニズム期初期の打ち型の数量 (アッティカ・ドラクマ換算) は、ドゥ・カラタイにより次のように推計されている。

(没後) アレクサンドロス大王 (332-290BC)	39,300dies
没後フィリッポス2世 (?)	9,000dies
リュシマコス (299-281BC)	2,830dies

の計 51,130dies である⁶⁵⁾。紀元前3世紀初め铸造済みの都市の分を加えると、総計約 65,000dies となる。打ち型あたりおよそ2万個の硬貨 (drachma) が打ち出されるとして、貨幣金額になおすと 216,700 タラントン、銀換算で 5,675 トンになる。これはおよそ金 300 トンと銀 3,000 トンで構成されていたという⁶⁶⁾。とくにアレクサンドロス大王の遠征によりペルシャ帝国で保蔵されていた銀塊を銀貨に铸造しなおしたことが大きく寄与していた⁶⁷⁾。

Lund (2000: 87-88) 参照。

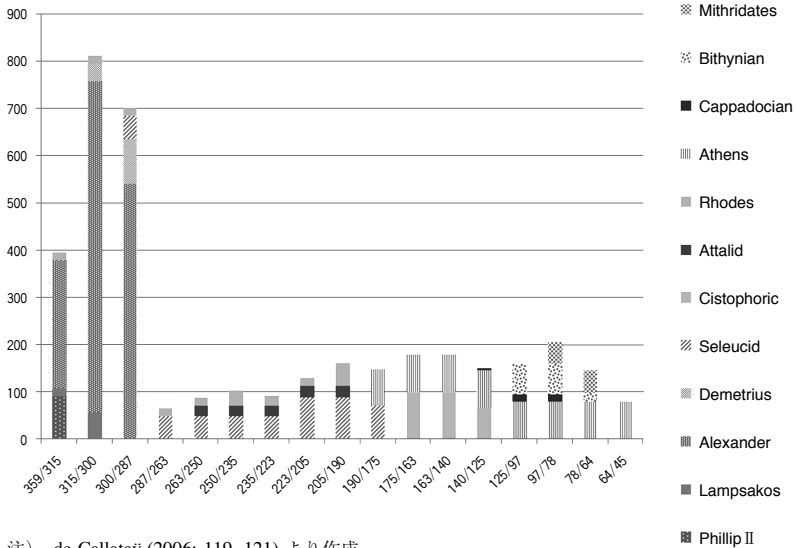
65) de Callatay (2006: 93)

66) de Callatay (2006: 108-9). 打ち型の推計と打ち型あたりの硬貨铸造量の推計については、de Callatay (2006: 6-76), Esty (2011) を参照されたい。

67) アレクサンドロス大王がペルシャ帝国金庫から収奪した金額は 180,000 タラントンであったといわれるが (Diod. 17.71.1), 332-290BC のアレクサンドロス貨発行推計額はおよそ 90,000 タラントンとされ、収奪額に対応している

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

図7 ヘレニズム期銀貨年間平均発行量（打ち型）



注) de Callatay (2006: 119, 121) より作成

先の述べた交易活動の進展とその変容は、交易を通じ資金の移動をダイナミックにもたらすことになる。さらに第2次ポエニ戦争後のローマの台頭は、ヒスパニア、マケドニア、アフリカ、そしてアジアを属州化し、それら属州からの租税徴収により非交易ルートを介した資金の移動をもたらした。図7にはヘレニズム期の平均鋳造量が（ただし打ち型数をアッティカ単位に換算して）表示されている。各王国と都市国家で鋳造された（アッティカ単位に換算された）打ち型数量と鋳造期間から年平均打ち型数を算出し、それらを期間ごとに数量調整して表示している。したがって、期間ごとの数量は実際の数量ではなく、鋳造期間で平均化された値であることに注意されたい。さらにプトレマイオス朝エジプトでの鋳造額は没後アレクサンドロス銀貨をより軽いプトレマイオス銀貨に鋳造しなおした可能性が高いため、図7では重複を避けてその打ち型数量は除外されている。このよう

わけでなかった (de Callatay 2011:23)。

な留意点がありながらも、図7からは359~287BCにおける貨幣鑄造量が著しく大きなものであったことが窺える。それ以降の期間の鑄造は、例えばセレウコス王国のケースでは、アレクサンドロス銀貨の減耗とその更新に対応する程度の鑄造規模であったといわれ⁶⁸⁾、別の例ではアテナイ(164/63~87/86BC)で発行された新型(ステファノス)銀貨がある一定量を維持して鑄造されており、デロス自由港にあってその通貨は周辺唯一の国際通貨として使用され、その供給が維持されていたといわれている⁶⁹⁾。

もちろん、全体から見た貨幣ストックの変化は図からも判別しがたい。この点についてもドゥ・カラタイの推定があつて、100BC頃の貨幣流通量は24,000diesであり、およそ銀2,016トンであったとされ、これに対しローマとイベリア半島ではおよそ894トンであり、紀元前3世紀初め銀3,000トンの30%弱となる。前2世紀初めにおける貨幣ストックの7割が地中海東部に留まり、残りがイタリア(ローマ)に流れたことを意味する。そして前1世紀前半のイタリアの銀流通量は1,000トンほどになったとされる⁷⁰⁾。この変化は、前2世紀後半以降の租税と交易による資金の流れの変化が大きく変わり、ローマに資金が集中するようになり、共和制後期(とくに前1世紀)ローマの経済成長につながった。同時に東地中海(ヘレニズム)世界からは資金が流出し、一種のデフレ状態を引き起こしたのではないかと推測されている⁷¹⁾。

このようなヘレニズム期を通じた資金移動の変化と偏在とは別に、ヘレニズム期前期においては依然として地域交易圏と地域通貨の組み合わせが

68) Aperghis (2001: 93-95)

69) Bresson (2016: 425-27), von Reden (2010: 85).

70) de Callatay (2006: 109-10, 112)

71) 明確な証拠があるわけではないが、バビロンの価格データからは前4世紀末の価格暴騰後、170BC頃まで緩慢な物価下落傾向が観察され(van Leeuwen, Folvari and van Zanden 2015: Fig. 20.1, van der Spek, Foldvari and van Leeuwen 2015: Fig. 19. 1), エジプトにおいても160-130BCに物価が最低水準になっていた(von Reden 2010: Fig. 10)。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に健在であり、表5のように古典期と同様に、アッティカ単位とは別にアイギナ単位やコルクキュラ単位があり、アナトリア地域の他に東地中海南部（エジプト、シリア、キプロス）を領有したエジプト王国内ではプトレマイオス銀貨が（アッティカ単位の）没後アレクサンドロス銀貨より軽い重量単位で鑄造され流通していた。国際通貨としてのアッティカ単位通貨も健在であったが、それよりも軽い単位の通貨を鑄造・流通させることにより、両替コストを高めて地域通貨圏を維持しようとしていた。古典期から続く地域交易圏の頑健性を示す証拠ともいえる。他方、国際通貨の単位はローマの台頭と共にアッティカ単位（4.3g）からデナリウス単位（3.9g）に移っていくのであるが、それでもヘレニズム期を通じて多くの場所で鑄造されたアッティカ単位の没後アレクサンドロス銀貨や新スタイルのアテナイ銀貨は国際通貨として流通した。それは、その発行体である権力と権威そして財政的圧力、軍事的ニーズ、そして王都や宮廷の需要から無関係ではなかった。その中で地域通貨が維持されてきたのは、「それ自身単純に貨幣政策では変形できない経済パターンの部分」⁷²⁾があったからであり、地域

表5 ヘレニズム前期銀貨重量単位 (g)

	地域交易圏	
	テトラドラクマ	ドラクマ
アイギナ		6.1
コルクキュラ		5.75-5.0
ベルシャ		5.6
アッティカ	17.3-16.8	4.3-4.2
キオス	15.6	3.9
プトレマイオス	14.3	3.55
ロードス	13.6-13.4	3.4
キストフォリ	12.6	3.15
ローマ		3.9 (デナリウス)

注) Mørkholm (1991: 9) から抜粋。

72) von Reden (2010: 85)

交易と地域間交易の多層構造は容易に崩せない構造的なものであったからといわざるをえない。

最後に、次のエジプトに入る前に、国家銀行 (*demosiai trapezai*) にふれておこう。ヘレニズム期に入り、ギリシア世界の銀行活動に注目すべき変化が生じていた。国家 (公共) 銀行というべき、都市国家に直属した金融組織が出現していた。230BC 頃にミレトスで国家銀行の存在が確認されているが、より早期にアテナイのリュクルゴス政権下において政府内に銀行家が配置されていたとされている⁷³⁾。また前4世紀末にアモルゴス島の都市アルキシネを舞台に国家銀行が存在し、ナクソスの貸主とアルキシネ市の間借入契約がむすばれ、その担当者が仲介と管理にあっていた。ガブリエルセンによれば、国家銀行が長期間相当量のリスクフリーな貸付をおこない、富裕企業者と協力、仲介に積極的にあたっていたという。また、ヘレニズム期の都市は貧窮状態にあったわけではなく、起債をするほど信頼性があったこと。結果的に230BC 頃にミレトスの例まで時代を下るのでなく、実質上紀元前4世紀末には国家銀行が存在していた。またミレトスのように、市民から恒久的な利付き預金の形で出資してもらい、見返りに死亡時まで給付する年金 (利子) を約束して、国家銀行の資本を形成していた⁷⁴⁾。市民のみならず、ほかの多くの資産運用を行っている (私的銀行家、金貸商人、聖殿、都市など) 関係者から資金を集め、貸付の仲介を行っていたわけであり、資金量の豊富さから金融上の規模の利益を国家銀行は享受していたともいえる。国家銀行は政府にとっても都合の良い存在であった。公共貸付活動を国家銀行に移転させることにより公的借入と租税の間のバランスをどう取るかという一般的な問題に対処する能力を得ることができたからである⁷⁵⁾。

73) Bogaert (1968: 88-89)

74) Gablilsen (2005: 144-46)

75) Gabrielsen (2005: 149)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

3.3 エジプト

エジプトは紀元前7世紀からのギリシア人の交易活動を通じて彼らと接することになり、その過程で貨幣が伝播して前4世紀末までにはギリシア移民の中ではなじみのあるものとなっていたが、貨幣取引はエジプトの中ではあくまでエリートサークルに限定されていた。貨幣（硬貨）が本格的に導入されたのは、アレクサンドロス大王のエジプト征服時であり、その後を引き継いだプトレマイオス朝においてであった。大量のアレクサンドロス貨が供給された後も、エジプトの実質支配者であったプトレマイオスにより同通貨がエジプトにおいてもより軽量の単位で発行されていたが、306BCに国王（プトレマイオス1世ソテル）に推挙されて、王国固有の硬貨が発行されるようになった。その後の過程で、エジプト内に全面的ではないが貨幣経済が浸透し、前2世紀にはエジプト神殿まで完全に貨幣経済に取り込まれていた。さらに銀行家はすでに1世ソテル時代に私的銀行家として存在しており、その後王立銀行、(外貨両替を扱う)認可銀行が設立されたが、後者は紀元前3世紀末に外貨交換が禁止されるとともに消滅していった。前2世紀以降になると、私的銀行家が両替を主要業務にして再びみられるようになった⁷⁶⁾。のちに述べるエジプト特有の王立銀行 (*basilikai trapezai*) の設立にあたっては、ヘレニズム世界で顕著となった国家銀行の影響があったとされる⁷⁷⁾。エジプト国内では租税納付や賃金支払い、小取引における貨幣（硬貨）の使用という貨幣経済化が進んでいくが、その制度上の転換について、プトレマイオス2世（フィラデルフォス）の改革 (265/64BC) が果たした役割を見落とすことができない。

改革

265/64BCにおいて次のような事項で改革が行われた⁷⁸⁾。第1は租税徴

76) Bogaert (1994: 57, 1998: 169-70)

77) Bogaert (1994: 39-40)

収のみならず独占事業、公共事業において全面的に請負 (farming) システムがとられたことであり、第2は閉鎖通貨システムであり、王国固有の銀貨が鑄造されたが小取引をよりスムーズにするため青銅貨が大量に発行され、実質上青銅本位制となって地方経済 (ノモス) 内の資金循環を支えたこと⁷⁸⁾。第3は王立銀行を国内に立ち上げ、各ノモス (州/県) を中心に王立銀行・支店網をつくり、請負、納税、政府支出を含めた州政府の経済活動の円滑化を図ったこと。最後にセンサスを実施し、土地、人口調査を行い、人頭税や労役賦課のための基本台帳を作成したことである。これらはそれまでの時代と特別異なるものであったわけではなく、一部はギリシア世界で生まれた制度・慣習を導入したものであり、一部は古代王朝から継続してきた制度・慣行の延長であった。改革はこれら制度的要素を組み合わせて、王国内で閉じられた通貨システムを通じて国内を貨幣経済化して統治しようとする試みであったといえることができる。

王国内はノモス (州/県) という行政単位で区画され、固有の経済循環システムが形成されていた。各ノモスは州 (*nomos*)、郡 (*topos*)、村 (*komê*) の3層構造になっており、それぞれに行政官、書記が配置されていた。財務面ではトップに財務官 (*oikonomos*) が置かれ、郡、村にそれぞれの財務官が配置され、さらに州レベルで会計上の監査のため監察官 (*antigraphus*) が配置されていた。また州財務官の直下に王立銀行があって、3層構造に沿って銀行、銀行支店、収税署 (*logutêrion*) が存在していた。各ノモスには租税、公共事業、(ごま油、ビール、塩、パピルス、織物などの) 独占工房の請負業者がいて、耕作者としての農民がおり、州政府に勤務する官吏、軍人 (兵士、傭兵)、在地軍人、地主そして商人などがいた。

78) Manning (2010: 128-57)

79) 銀ドラクマと青銅ドラクマの交換比率は、c. 265-220BC には1:1であったが、c. 220-200BC には1:2, c. 200-180BC に1:60, c. 180-164/3BC, c. 130-30BC に1:120 となって、王国の銀不足と青銅貨の大量発行の状況を反映していた (von Reden 2010: 151)。

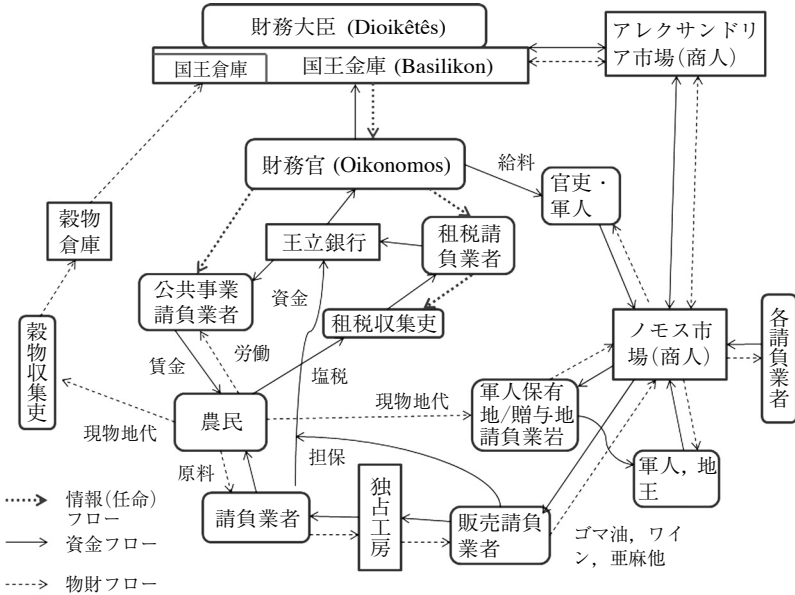
古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

貨幣経済化が自然には進んでいなかった地方では、各種請負と租税納付により資金の移動が行われ、祭祀や公共事業、買い付けなどの州政府支出や官吏・軍人等の消費行動により資金が循環する構造が人為的に出来上がっていた。センサスを通じて塩税（人頭税）が農民に貨幣納の形で賦課され、対して公共事業（とくに灌漑水路の補修）に強制的に駆り出されて、請負業者を通じて賃金が支払われ、塩税納付の資金源となっていた。そのほかに独占工房向けの原材料が割り当てられ、その対価が支払われていた。独占工房はまた生産と販売の請負業者がいて、その産物は独占的に州内で供給され（一部政府により買い付けされ、残りは市場で）販売されていた。農民は王領地の請負人（小作人）として行動し、地代を現物で納めていた。その穀物は収集官吏（*sitologos*）によって集められ、地方の穀物倉庫に一端納められ、必要分以外はアレクサンドリアの国王倉庫に集められ、エジプトの有力な輸出産物として販売されていた。在地軍人には軍人保有地（*klêroi*）があって、そこにも請負業者が介在し、作付け、収穫、販売を請負い、地代を貨幣で納めていた。州政府役人（官吏、兵士）も俸給を受けて消費を行い、州政府自身祭祀や公共事業、宮廷関係の支出をしていた。一般に政府に関わる請負業者は、オークションを通じて請負を認可され、予め担保（証拠金）となる金額を納めなければならなかった。

これらの貨幣を通じた受け取り、支払いはほとんどが王立銀行を介して行われていたのであり、租税、担保などは銀行の政府口座に振り込まれ、また公共事業などの資金も請負業者の口座に振り込まれていた。農民は塩税収集の請負業者やその代理人、収税吏（*logoutês*）から受領証をもらい、納税の証明とした。村落ごとの銀行支店や収税署に蓄積された余剰資金は州都の王立銀行に集められ、支払い分を差し引いた余剰分は、銀貨に直して首都の国王金庫に送金されていた。それら王国の（貨幣、穀物など）収入と支出の財務一切を統括していたのが財務大臣（*dioikêtês*）であり、王国の官僚組織の頂点にいる存在であった⁸⁰。

以上の資金の流れは、まだ全体像を完成させているわけでない。収入を構成する資金は政府関係者(官吏, 兵士), 在地軍人, 地主, 請負業者, 農民などといった人々に流れていたわけであり, 彼らの支出(消費)はノモスごとに存在した市場(商人)を通じて物資購入にむけられていたであろう。王国内で調達できない分は, 海外を通じてアレクサンドリアの市場にて調達されたはずであり, 国内全体を見ると首都・州都・郡邑の階層ごとに市場が形成されており, これら階層化された市場ネットワークを通じた

図8 プトレマイオス朝: ノモス経済



- 80) プトレマイオス朝の地方行政組織, 租税制度, 産業独占一般については例えば柘植 (1969), 各種租税と受領証については Muhs (2005: 41-84), 租税, 地代については von Reden (2007: 84-150) を参照。
- 81) プトレマイオス時代村落レベルで市場が成立していたことが指摘されている (Alston 1998: 174 n. 15)。ローマ帝政時代になるが, 中エジプトの都市 Oxyrhynchus では他地域とのコンタクトの内, 南北 180km 圏内で 45%, 首都は 25% 占めていたという。エジプトの都市センターはノモスの経済センターの役割を果たしていた (Alston 1998: 191-92)。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に資金還流があつて最終的に王国全体の資金循環が閉じられることになる⁸¹⁾。その際、各ノモスではおもに青銅貨が使われて、ノモスごとに資金循環が遂げられていたとすれば、首都向けの資金（主に銀貨）はノモスごとにどこからか調達されなければならず、その資金源として考えられるのは、独占工房や神殿、軍人保有地、贈与地から供給される特産物や農産物が市場ルートを通じて首都ならびにその他の州都向けに販売されて得られた貨幣収入であろう。その資金が（*apomoira* 税貨幣納分、職業税など）各種税や請負担保金の形で州の王立銀行に集められてノモス内の支出分を控除した余剰分が最終的に首都に送金されていたと理解され、図8で集約されるように、エジプト王国内で市場ネットワークが改革と併せて同時に（またはそれ以前に）形成されていたと考えることができよう。

プトレマイオス経済と銀行家

首都ならびに各ノモスに配備された王立銀行、支店、収税署という銀行システムは、現物税の納付が主体となる再分配（司令）経済が依然として大きなシェアを占めるなかで、意図的に貨幣流通を図ることにより租税納付の貨幣化を進め、貨幣供給の不足を補い財務上の業務をスムーズに遂行するために統治上不可欠となる制度であった⁸²⁾。すでに述べられたように、租税の請負制と貨幣納付の仕組みは、資金循環を制度的に組み込むためにも、（商人の仲介により構築される）市場の整備・発達を補足的に促す必要があった。資金循環の枠組みが大筋の部分で制度化されれば、残りは自然発

82) 穀物収集吏によって穀物が村落から首都まで収集され輸送される（現物収税）モデルⅠに対し、穀物以外の一次産品や製造物を大規模に開発、收取するために私的資本（請負）を利用した（貨幣収税）モデルⅡの世界が存在する。これは「フィラデルフォスの収税法」の実践化に帰結するようなシステムでもある（Turner 1984: 150-51）。他方、穀物の運送と船積みは民間の手に委ねられたとされ、船舶業者は首都への運賃だけでなく、首都での物資の買い付けと地方への搬送による商業行為も行っていた（Thompson 1983: 70-71, 74-75）。他の主要物資についても同じような組織があったと考えられている（Fraser 1972: 148）。

生的に埋め合わされて取引全体が発展して資金循環は構造化されていく。その大筋とは、ひとつは各ノモス内で制度化された塩税(人頭税)やそのほかの貨幣税の納付と州政府の貨幣支出(官吏・軍人給料, 公共事業, 祭祀, 強制買付, 輸送など)であり, もうひとつは余剰資金の首都への送金であり, その他穀物やワインなどの現物納付による収入をもとに, 首都アレクサンドリアで創出される祭祀費, 軍事費, 宮廷費などの膨大な貨幣支出である⁸³⁾。

これら首都の支出が穀物以外のさまざまな食料, 物資の需要を形成したのであり, 一部海外交易を刺激して海外ワインなどの大量輸入を派生的にもたらした。さらに国内の産物に対する需要にもなって, 近郊の下エジプトや中エジプト・ファイユームの地域で特産物の生産と販売を促したと考えられる。ノモスにおける独占工房の(ゴマ油, 塩, 亜麻布などの)産物やワイン, オリーブ油, 果実・野菜など農産物の販売は, ノモスの領域内に留まらず, (強制買付分も含めて)首都むけにも輸送, 販売されていたと考えられる⁸⁴⁾。このような状況で, 王国の商取引のシェアは限られていたと

83) アレクサンドリアの人口は, ディオドロス(Diod. 17.52)によれば60BCに自由民の人口が30万人であり, ストラボン(Strab. 16.2.5)が24~20BCの間に訪れた際は50万人と推定されている。シャイデルは, 近世の江戸とロンドンを参考に, 住民人口は紀元前3世紀末には定常状態に入ったと想定し, 250BC頃に30万人程度となり, その後次第に40万人に近づいて行ったと推定している。プトレマイオス王国の貨幣収入はプトレマイオス2世時に14,800タラントンであり, 国庫に蓄積された金額は740,000タラントンに及び, 貸付により富を増やしていたといわれる。王国末期のプトレマイオス12世時には12,500タラントンであり, アレクサンドリアの分を除くと6,000タラントンであったといわれる(Fischer-Bovet 2014: Table 3.1)。

84) 地方から首都に大量に供給された物資は, 穀物, ゴマ油, 亜麻布, バビルスであったとされ, 不足が生じないように現物納入と独占工房請負により確保が政府により図られていた(Fraser 1972: 147-48)。ディオニソスの祭祀や国王の浪費はエジプト内の消費習慣に影響を与え, 王国の政治的経済的戦略の一端であったとの解釈もある(von Reden 2011: 423-24)。ギリシア人を主体とした(軍隊を含め)王国の大量の需要は, ファイユームでのブドウ栽培とワイン醸造, エンマー麦から小麦への転換, 請負による独占工房の生産と販売を刺激し, 対象物資の生産と消費の増加をもたらし, 国内と首都の市場力を高めることになった(von Reden 2011: 435-38)。ワインやオリーブ油は

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
はいえ、ノモスの州都ならびに首都、そして海外向けに様々な取引が行われていたと想定され、王国の銀行家が徴税と州政府支出の財政業務だけでなく、顧客との間のネットワークの枠内に限定されながらも、私的取引に対応した資金決済、移転、融資を行っていたことに注目すべきである。

フォン・レーデンによれば、王立銀行の機能は「ノモス（州）政府の貨幣供給を保証し、個人顧客の取引を実施する」⁸⁵⁾ ことにあったという。徴税と支出の財政業務のほかに、収税業者の口座に振り込まれた金額と租税請負業者の請負目標額を年度内の一定期間（1～3ヵ月）に均衡化させることにより、州政府は期間ごとに保証される租税金額を処理することが可能となった。また支出に関しては、関係者の給料、賃金に対し納税義務額を銀行の口座のなかで控除して相殺することが可能であった。すなわち、政府に勤務する官吏、軍人のみならず、請負業者を含めてそれぞれの口座に資金が振り込まれ、または支払われることにより、振替 (giro) がなくても一銀行内の口座間で資金移転が可能であった⁸⁶⁾。

また先に述べたように、王立銀行のヒエラルヒー構造により、村落の収税署から、その残高が期間内に、郡の支店を通して州中央銀行に移され、州政府口座に集められた資金は、州財務官 (*oikonomos*) にとって年度内にあっても利用可能になった。支出分を差し引いた余分の資金は、さらに首都の国王金庫に送金され、中央政府の貨幣収入となった。以上のように王立銀行のシステムは、州政府の資金回転を高め、貨幣供給を実質的に増加させる機能をもっていたことがわかる⁸⁷⁾。

民間の事業に委ねられ、前3世紀に在地軍人保有地のブドウ栽培者は *apomoira* 税上の優遇措置をうけており、外国産ワインの高関税とともに在地ブドウ栽培の刺激策がとられていた (Fraser 1972: 166)。さらにファイユームにおけるブドウ栽培については Clarysse and Vandorpe (1998: 67-70) と開発と作物一般については周藤 (2014: 136-41) を参照。王国の祭祀と顕示的消費については周藤 (2014: 120-28), ならびに波部 (2014: 61-64, 123-222) 参照。

85) von Reden (2007: 256)

86) von Reden (2007: 257, 269-75)

請負業者が土地管理や租税収集、独占事業に関わることにより、利潤追求事業の機会が市場活動以外にも広がることになった。これらの事業の相互依存性は、銀行を通じた取引の機会も増やすことになる。首都や外国の都市との関わりを持つような(海外交易などの)大規模事業は、国王を含めた少数の特権階層に限定されていたように思われるが、多くのノモスで活躍した請負業者や商人たち、そして土地の贈与を得た高官たちの所領管理人やその下で従事するさまざまな代理人たちは、顧客層として銀行との取引関係をむすんでおり、彼らの地位や事業に根ざして築かれたネットワークにしたがって、銀行は融資や支払・受取などの金融サービスを提供していた。賃金の分配、利子受取、資金移転などに関わる商業上の支払い・受取りを容易にし、請負契約や賃貸契約も銀行を通じて実施されていた⁸⁸⁾。

また口座保有者は銀行に向け支払指図書 (written orders of payment) を送ることにより、代理人が遠隔地で取引を行うことを容易にし、口座がなくても貨幣支払いや受け取りを銀行が受け付けることにより異なる場所での資金管理を可能にし、取引の法的保障を与えることにもなった⁸⁹⁾。ただし、それら指図書はあくまでも口座保有者や代理人、銀行の間の個人的知己の関係に限っており、為替とはかけ離れたものであった。つまり、前3世紀においては「ギリシア人のみ、とくに特権的地位をもった在地軍人、国王スタッフが口座を保有し、銀行はギリシア文化と政権の次元内で位置づけられる」⁹⁰⁾のものであった。他方では、ギリシア人とエジプト人との同化が

87) von Reden (2007: 268-73)

88) 前3世紀半ば、財務大臣アポロニオスの贈与地 (*dôrea*) の管理人ゼノン、9人の銀行家 (4王立銀行家、5認可銀行家) と取引関係をもっており、銀行家たちは租税徴収のみならず、商業上の支払いや貸付を管理人または主人の代理人むけに行っていた (Bogaert 1991)。また Oxyrhynchus 州の銀行家に関わるバビルス文書で、銀行家が政府業務だけでなく顧客むけサービスも行っており、その際バビルスのストックが自分自身だけでなく政府当局のためにも求められていたことが窺われ、エジプト特有の銀行行政と活動の内情を垣間見ることができる (Lewis 2001: 50-52)。さらに銀行家の活動については von Reden (2007: 286-89) も参照。

89) von Reden (2007: 290)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に進んでいった前2世紀になると、すべての階層が支払いを行うために私的銀行を使っていたとされている。ボゲールによれば「紀元前2世紀のエジプト銀行の顧客と前4世紀のアテナイの銀行顧客を比較したとき、エジプト銀行内では大きな民主化が進展していたといわざるをえない」⁹¹⁾のである。前3世紀半ばになると銀行への支払指図書が見出され、その形式も二重文書から単一文書に簡素化されていったが、前1世紀になると口座保有者が別の銀行への資金移転と指定受取人への支払いを指図する文書がいくつも現れ、正副（控え）があつて小切手として使用されていたと推測されている⁹²⁾。ただし支払人と受取人は知己の関係にあり、第三者への譲渡は可能でなく、完全な交換手段としては機能しなかったが、現金移動だけでなく、銀行間の債権債務の発生により資金移転があつたとして、貨幣使用を節約する機能を持っていたと考えられる⁹³⁾。そこにプトレマイオス期（と続くローマ帝政期の）エジプトにおける貨幣経済化と付随した銀行制度による資金決済機能の発展を見て取ることができる。

3.4 ローマ：経済発展と銀行家

共和制ローマが対外的に大きく進展していく時期は、紀元前3世紀後半、とくに第2次ポエニ戦争後である。とりわけ、前2世紀になると、ライバルとして君臨したカルタゴ、マケドニア、セレウコス王国を次々と征服、従属化して地中海周辺地域を属州化していった。その動きと並行してイタリア国内の経済のみならず対外交易も発展し、付随して銀行家ならびに金融業者の活動が活発化していった。第3次マケドニア戦争後、東地中海の拠点としてデロス島が自由港化し、イタリア商人のみならず多くの外国商人そして銀行家が滞在し、交易中継基地としての役割を果たすようになった。

90) von Reden (2007: 294)

91) Bogaert (1998/99: 138-39)

92) Bagnall, R. S. and R. Bogaert (1975), Bogaert (1994: 245-52).

93) Bogaert (1994: 252)

た。すでにふれたようにイタリア商人の存在が大きくなり、ロードスからデロスへの交易の重心移動が顕著にみられるようになった。東地中海地域にとってイタリアの存在が政治面だけでなく、経済的にも大きくなっていったことを示している。

この背景には、イタリアの経済発展が大きく関わっていたわけであるが、それはすでにホプキンス・モデルとして表現されたように、政治的（非交易）ルートを経た資金フローと交易（市場）を通じた資金フローで構成される資金循環体系が、イタリアへの資金流入超過がみられながらも紀元前2世紀後半以降地中海世界で成立していたことに負っている⁹⁴⁾。地中海沿岸地域（ヒスパニア、アフリカ、マケドニア、アジア）の属州化は、属州税、賠償金、貸付利息と返済、地代といった形でローマ（イタリア）への資金流入を恒常化させ、それをもとにローマ貨幣（デナリウス）が大量に発行された。これが、海外での軍事支出や国内の公共事業のための資金となっただけでなく、民間への資金浸透により元老院・騎士階層を中心にした大規模な収益事業、とくに海外交易への投資に向かわせ、国内の経済発展の一因にもなった⁹⁵⁾。紀元前2世紀初めから、ガリアや東地中海むけのワイン輸出が（コサやボンベイなどを拠点にして生産された）アンフォラを通じて観察されるようになり、プリンディシ産のアンフォラに積まれたアドリア海周辺産出のオリーブ油がアレクサンドリアやその他のエーゲ海都市にむけて運ばれていた⁹⁶⁾。逆に、奴隷や中東産の奢侈品がコス産やキオス産な

94) Hopkins (1980, 2002), 明石 (2009).

95) 当然ながら海上貸付など対外投資には運用上危険分散の発想も組み込まれていた。大カトーは借り手たちにパートナーシップを結ばせ、彼自身一株のみ所有して解放奴隷を派遣して航海に関与させたという (Plut. *Cat. Mai.* 21. 5-6)。貸付分はおそらく担保をとって保証を取り、他方収益分は株をシェアすることにより信用リスクを削減したものと解釈されている (Kay 2014: 145-46)。

96) Will (1982, 1997, 2000). ポンベイ産のアンフォラで運ばれたワインは、前3世紀第4四半期には地中海中に輸出されていたが、そのワインはおそらくコス産ワインの模倣であったとされている。ボンベイのワイン販売者たちはアンフォラをコス産のものと似せて作らせ、ワインを販売していたのである

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心
 どのギリシア・ワインと共にイタリアへ運ばれており、イタリア本土にお
 いて事業拡大による奴隷需要と富裕層を中心にして旺盛な消費需要が生ま
 れていた⁹⁷⁾。

前2～1世紀のローマの経済発展については、次の表6のようにケイ (P. Kay) により大胆な仮説に基づき数量化が試みられている。名目 GDP (所
 得ベース) の推計は Scheidel and Friesen (2009: 79-82) の方法に従い、所得
 分布の形 (べき乗則による分布) を事前に仮定して、(資産の6%相当として推
 計された) 限られた所得情報を投入することにより全体を推計している⁹⁸⁾。

表6 ローマ共和制後期経済

	200	150	100	50BC
人口(000)	3,192	5,023	5,910	5,845
自由民(%)	80	76	72	59
都市部(%)	14	14	14	20
奴隷(%)	6	10	14	21
国家支出(百万 HS)		55	80	141
私的消費(百万 HS)		823	1,798	2,436
その他消費・投資(百万 HS)		93	590	1,181
名目 GDP(百万 HS)		971	2,468	3,758
GDP 貨幣経済化率(%)		39	56	68
イタリア貨幣流通量(百万 HS)		280	864	988
流通速度		1.26	1.43	2.47
デフレーター	100	120	180	234

注) Kay (2014: 183, 284, 298-303, 305, 314, 317, 320, 322)
 4HS (セステルティウス)=1 デナリウス

- (Will 2000: 32-33)。
- 97) 前2世紀にはギリシア産のワインは少なかったが、前1世紀には増加したこ
 とが M. ウァッロの言葉で伝えられている (Plin. HN. 14.96)。さらにカエサ
 ルがディクタトル時ならびにヒスパニア戦争凱旋時でキオス産とファレルヌ
 ム＝ワインを与え、3度目のコンスル時の祝宴ではキオス産、レスボス産、
 マエルティニ (シチリア＝メッサナ) ワインとファレルヌム (国産) ワインが
 与えられたという (Plin. HN. 14.97)。なお、ファレルヌムというイタリア産
 ワイン・ブランドの形成については鷲田 (2005) を参照されたい。
- 98) Kay (2014: 289-97)

人口については、シャイデルが言及しているように、イタリア自由民の人口は、内戦と海外戦争による兵力の消耗と徴発ならびに（死亡率の高い）都市への流入、植民都市への移民などにより大きく影響をうけ、非都市部のイタリア国内の自由民人口は、ローマ市やその他都市人口の増加もあって、全体として停滞を余儀なくされた⁹⁹⁾。他方で富裕層の奢侈的消費や事業への投資拡大により労働需要が増加し、自由民の供給の停滞化を埋め合わせるように奴隷の輸入が急拡大し、その人口比率を大きく高めたことが表から窺うことができる。

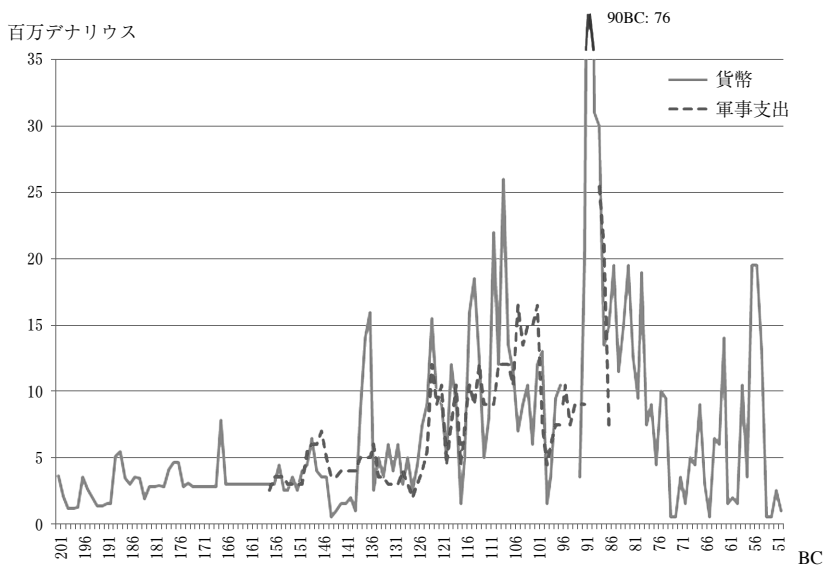
貨幣供給の増加は、図9に表れているように、海外からの収奪により大量に銀がイタリアに流入し、それはまた政府支出とくに軍事支出（兵士給付、報酬）と連動していた¹⁰⁰⁾。変動しながらもフローとしての貨幣発行は蓄積して150~50BCの間に2億8千万HSから3.5億HSにも増加したことになる。イタリア経済全体が貨幣経済化されたわけではないので、貨幣経済化の進展（150BC: 39%→50BC: 65%）を考慮に入れて、貨幣経済化された分の名目GDPと（銀行信用も加えた）貨幣流通量との比率を求めて、流通速度を算出すると、150BCの1.26から50BCには2倍の2.47へ上昇し、貨幣の回転速度（貨幣使用の効率化）がこの間に高まっていったことが読み取れる。同じ期間（穀物価格で表示された）デフレーターが2倍に上昇しており、名目GDPは150~50BCの間に3.9倍弱であったのに対し、実質はおよそ2倍になっていた。紀元前2~1世紀の間のローマ共和制後期の経済発展の背景には、先に述べた諸要因（収奪、貨幣流入、交易）の他に、付随して貨幣供給のスピード以上に経済成長を可能にした信用供給の成長があったことになり、それを実現可能にした信用供給者（貸し手）、金

99) Scheidel (2007: 323-29)

100) 図9ではCrawford (1974)の貨幣鑄造の系列にHarl (1996)の賠償金の系列を接続させているが、後者の系列を1/4にスケールを縮小させて接続させている。このことは、賠償金による金銀流入のうち1/4が貨幣鑄造に回り、残りはそのまま使用もしくは退蔵されていたことを示唆しているのかもしれない。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

図9 ローマ共和制後期貨幣と支出



注) Crawford (1974: 694-707), Harl (1996: 41-42)

融仲介者、借り手（事業者、商人）を結ぶ金融仲介の制度的展開がこの時期に存在していたことに注目する必要がある¹⁰¹⁾。

再度のべることになるが、前2世紀後半から前1世紀にわたるローマ世界の東地中海地域への進出は、イタリア本国の経済発展と呼応するように（出資者も含めて）ローマの実業家たちに大きな利益獲得の機会を与えることになった。彼らは、属州地の租税回収や土地担保貸付（高利貸し）のみならず、本国のワインやオリーブ油の輸出の見返りに、中東、インド経由の奢侈品の輸入や本国の労働需要に対応した奴隷交易に従事していたのであるが、実際彼らが関与してきた職業的範囲は各種の商業、輸送や金融業／銀行といった特定分野に限定されることなく、より包括的、利益追求の

101) 銀行など金融仲介者の活動については Kay (2014: 113-28) を参照。さらに Andreau (1999: 9-63), Verboven (2002, 2009) を参照。

であったといつてよい¹⁰²⁾。

交易拠点となっていたデロス島では、イタリアから元老院や騎士階級の家族や親戚、彼らの代理人や友人、解放奴隷・従者が事業体のメンバーとして到来しており、小アジア、中東(シリア)、エジプトなどからの交易者・商人たちも同じく滞在して、奴隷や奢侈品の取引の場を自然に形成していた。各商人たちはそれぞれの宗教結社(*collegium*)に所属し、その中で相互出資した資金(*collatio*)からリスクのある海上交易向けの融資が行われていた¹⁰³⁾。もちろん、銀行家も多数存在し、多くの交易商人・船乗りが集まる島内において銀行に資金を預け、両替や支払・振り込みなどの金融サービスを受けていたのであろうし、一部は商人たち向けに貸し付けが行われていた。銀行の性格上、リスクな海上貸付への依存度は低かったと考えられるが、交易拠点であるデロス島内にあってその区別は相対的なものであったのでなかろうか¹⁰⁴⁾。88-85BCのミトリダテス戦争による破壊と虐殺の後、商業の拠点は軍事的プレゼンスも手伝って小アジアに移り、デロスの交易拠点としての価値は急速に低下し衰退していった¹⁰⁵⁾。

一般論として、経済発展の途上にあったイタリア本国において、銀行家の登場は早く前4世紀末には見られ、前3世紀半ばにはその活躍が確認される¹⁰⁶⁾。前2世紀半ばに、スキピオ・アフリカヌス・エミリアヌス(アフ

102) Andreau (1985: 384-85)。アンドローはこの時期の金融業者が帝政期の後継者より裕福であり、地理的にも大きく移動していることを指摘し、その移動が大きな金融機会を彼らに提供していたとものべている。

103) Rauh (1993: 259, 270, 287)

104) Rauh (1993: 257, n. 17)。デロス島の著名な銀行家としてアスカロンのフィロストラトス(Philostratos)の他に、M. ミナティオス(M. Minatios), M. ゲリラノス(M. Gerillanos), L. アウフィディオス(L. Auphidios)がいる。ともに顕彰のために建てられた彫像の台座にイタリア、ギリシア、フェニキアの *emporoi* (商人), *naukeleroi* (船主), *ergazomenoi* (貿易業者) といった寄与者たちが刻まれており、彼らが銀行家の顧客であったことは想像に難くない(Bogaert 1968: 187-90, 193-96)。L. Auphidios やその息子(L. Auphidios Bassos)についてはさらに Rauh (1993: 214, n. 37) 参照。

105) Rostovtzeff (1941: 1024), Rauh (1993: 68-73)。

106) Andreau (1987: 337-40, 1999: 30-31)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心にリカヌスの養子）は2人の義理の叔母の夫に、持参金の残額（50タラント）を自分の銀行口座から支払ったとされている¹⁰⁷⁾。おそらく、同じ銀行内の口座に振替が行われて資金が移動したと考えられ、資金移転のサービスとともに一銀行家に多額の預金が預けられていた事実にも留意すべきである¹⁰⁸⁾。

銀行家そのものは預金の保全を第一にし、顧客への金融サービス（負債の返済サービスも含めて）を提供し、リスクな貸し付けを避ける傾向にあることは、ギリシア人銀行家と同様である。しかし、他方ではこの時期の金融業者たちの行動は多様であり、銀行家 (*argentarius*) の業務に限定されるものではなかった。一方で実業家であり、商人であり、高利貸しでもあったのである。デロス島で有名な銀行家の一人がシリア、アスカロン出身のフィロストラトスであり、前2世紀末か前1世紀初めに居住しており、またナポリ市民でもあった。彼の名はデロス島の彫像の台座だけでなく、シリアの聖廟（サンクチュアリ）の劇場建立募金リストや他の奉献碑文中にみられ、またナポリ市民同様にナポリ人により同胞として遇されていたことから、彼がフェニキア、デロス、ナポリを股にかけた活動を行い、奴隷交易や中東からの奢侈的な交易品を扱っていた実業家でもあったことが窺われる。

さらに紀元前1世紀キケロの時代には、*negotiator* として多様な経済活動を行った人物としてラビリウス・ポストゥムスがいる。当時 (57BC) ローマに亡命していたエジプト国王にエジプト国内の収入を担保に大口の資金を融資し、王位回復後担保にしていた国内収入や独占事業の管理を財務監督者としてアレクサンドリアで任されることになり、ほぼ毎日当地からエジプト特産品（化粧品、亜麻、パピルスなど）を積載した船舶がプトリ港

107) Polyb. 31.27.6-7.

108) 同じく前2世紀後半のプラウツスやテレンティウスの喜劇の中には、同一銀行家の口座間で振替が行われたことを示唆する記述がみられる (Plautus, *Asin.* 436-40, *Terentius, Phorm.* 921-22)。

にむけて出航していたという¹⁰⁹⁾。その行為は、銀行家というより実業を兼ねた商人的金融業者であったというべきであろう¹¹⁰⁾。この他にも、キケロの時代には元老院や騎士階級の出資者がいて、金貸し (*generatores*) や資金仲介者を通じて実業家、商人へ事業資金が流れていた。プトリの銀行家とされる M. クルウィルスやウェストリウスは金融仲介活動のみならず、商業や他の事業活動を行っており、キケロやアティックスを含め、様々なひとから融資を受けていた¹¹¹⁾。クルウィルスはカリア (小アジア) の諸都市に貸し付けを行っていたが、その資金はポンペイウスのものであったとされ、彼のために運用を行っていたといわれる¹¹²⁾。ウェストリウスは、クルウィルスと同様にキケロにより言及されていたが¹¹³⁾、彼らの活動の内容から、両者とも単なる銀行家というよりむしろ実業家 (*homme d'affaire*) といった方がよいとされている¹¹⁴⁾。

4. 結論：貨幣経済とは？

本稿で取り扱われた東地中海世界 (古典期・ヘレニズム期) において、始問われていた主題は、貨幣経済をどのような枠組みで理解すべきかであった。これは、この地域において最初に硬貨が創造され、比較的短期間でエーゲ海世界に広まっていった事情に一部は負っている。しかしながら、より重要な点は、紀元前5世紀にアテナイがデロス海上同盟を名目にしてエーゲ海沿岸地域の覇権を握り、海上防衛の負担として各都市から貢租金

109) Cic. *Pro Rab. Post.* 40. Frank (1920: 227-28).

110) Bogaert (1968: 223)

111) Andreau (1997: 125-26). ウェストリウスがプトリで染料の製造をしていたことはプリニウスやウィトルウィウスの著書の中で述べられている (Plin. NH. 13.57, Vit. 7.11.1)。

112) Bogaert (1968: 224), Cic. *Fam.* 12.56. ちなみに M. クルウィルスの父 N. クルウィルスはデロス島の奴隷貿易に参加していたといわれる (Rauh 1993: 47-48, n. 116)。

113) Cic. *Att.* 6.2.3; 14.12.3.

114) Bogaert (1968: 224)

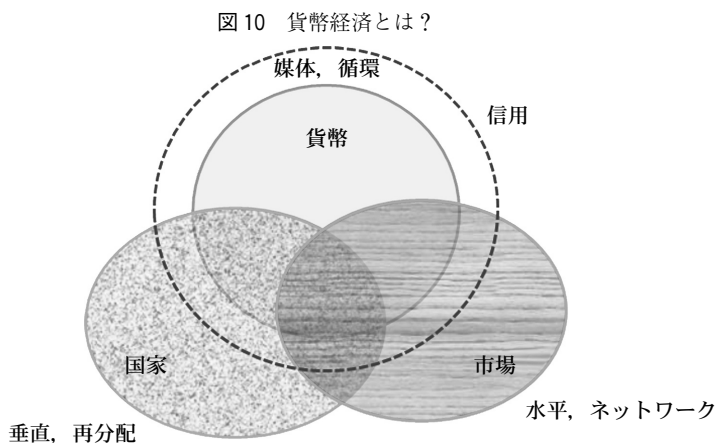
古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
を納めさせたところにあり、結果アテナイへの支払い手段としての硬貨の
存在がクローズアップされたことにある。加えてラウリオン銀山を有して
大量の銀貨の供給を継続し、流動性の確保を維持してきたのであり、貨幣
供給をベースにして東地中海世界の交易が、ペロポネソス戦争が介在しな
がらも前5、4世紀の間に活発化し、ペイライエウス港は物資が集積する
ハブ港としての地位を確立することになった。貨幣は本来交換媒体として
交易を専門とする商人の共同体（商人的経済）から進化的に生み出される
という見解があるのであるが¹¹⁵⁾、国家的信用を得て発行された硬貨は、
アテナイ帝国の枠組みの中で交換手段として極めて優位な位置を占め、利
用されるようになった。

この古典期の経験は、次のヘレニズム期に入ると、飛躍的な展開を示す
ようになる。それは領域国家の成立であり、統治手段としての貨幣（硬貨）
の大量発行である。そのきっかけとなったのが、アレクサンドロス大王の
東征であり、アレクサンドロス硬貨の大量発行であったことは言うまでも
ない。その後の後継者国家の対立の中で、それぞれの王国の通貨が発行さ
れ、国家への支払い（租税納入）手段として導入されたのであり、エジプ
トのように貨幣経済化への大きな推進剤となった。他方でギリシア人主体
の諸国家が成立するにいたって、東地中海を巡る交易活動の大展開が紀元
前3～1世紀に観察されるようになった。各王国ならびに都市国家固有の
通貨が発行されるとともに、依然としてアッテカ単位の銀貨（没後アレク
サンドロス銀貨、アテナイ銀貨）が国際通貨として使用され続けていた。地
域交易圏と地方通貨、ならびに東地中海全体の交易圏と国際通貨の関係が
継続して観察されたわけであり、通貨の大量発行と交易の活性化の環境の
なかで、交換手段としての貨幣が維持され、かつ発展していったことに注
目せざるを得ない。

このような一連の観察から、本題となる貨幣経済の枠組みをどのように

115) Hicks (1969: 63-68)

理解するかという問題に対し、自ずと次の図10で象徴されるような構図が浮かび上がってくる。国家への貢納物の納入と国家による支出という再分配の枠組みから生まれる「国家への支払い手段としての貨幣」という領域と、交易ないし市場の交換過程から派生して生まれる「交換手段としての貨幣」の領域が、国家の統治手段のひとつとして創造された貨幣(硬貨)により、融合一体化されるという状況が表現されている。国家が貨幣を支払い手段として利用し始めたとき、貨幣は市場における交換手段としても機能し、国家への支払い手段の入手と国家の支出を実現する市場への支払い(交換)の2点で、市場とリンクせざるを得なくなる。視点を変えるならば、貨幣の国家支払い手段化は市場における貨幣の存在を前提条件として実現する傾向にあったといえようが、エジプトのように市場が未発達のケースでは、貨幣を人為的に(公共事業などを通じて)入手できるように制度化される必要がでてくる。いずれにせよ、国家支払い手段として貨幣が利用されるためには、先行または同時進行の形で市場の貨幣経済化(交換手段としての利用)が進んで、国家と市場の領域を通じた循環システムが成立していなければならなかった。古典期の東地中海においては、硬



古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に貨以前の交易世界において、貨幣財が（鉄串、青銅鍋、銀塊などの形で）存在しており、不完全とはいえ非硬貨の貨幣が利用されていた¹¹⁶⁾。ところが前5世紀になると、特にその後半には、アテナイ帝国の成立と共に貢租金がアテナイに集中し、それを公共支出、戦費という形で散布するルートが前5世紀後半には出来上がっていた。同時に、ペイライエウスを中心にした交易システムが、アテナイの銀貨供給とともにほかの都市が貢租金のための銀貨を獲得する手段を提供することになり、結果エーゲ海を含めた広域経済の貨幣循環システムが形成されることになった。

この2つの領域を融合した貨幣循環システムは、ヘレニズム国家（マケドニア王国、セレウコス王国、プトレマイオス朝エジプト王国）にも固有の特性をもちながら観られたのである¹¹⁷⁾。さらに前2世紀後半からローマが東地中海でも台頭し、属州地から租税、地代、賠償金により資金を収奪してイタリアへ流入させ、他方で公共事業、軍事費などの政府支出ならびに富裕層の奴隷購入、中東からの奢侈財購入などにより、東地中海地域の交易を活発化させ、そのルートを通じ資金が流出するという、（イタリアへの資金流入が超過しながらも）ホプキンズ・モデルと称される貨幣循環体系がこの時期には成立していた¹¹⁸⁾。明らかに国家と市場の領域を、貨幣を通じ統合するという貨幣経済の枠組みをそこに見て取ることができるのである。

貨幣経済が進行するにつれて、貨幣単位をベースにした信用供給の領域が拡大してくる。貨幣と信用 (credit) は本来別概念のものであるが、貨幣の使用が一般化してくると、信用のベースが貨幣単位で表現され、流動性

116) Kraay (1976: 314-15), Seaford (2004: 102-09), Kroll (2008).

117) セレウコス王国では、その広大な帝国内の主要都市ごとに貨幣循環システム（政府支払い—租税回収サイクル）が成立しており、地方政府、都市センター、農村地域の間には銀貨を交換媒体にして食料、製品、サービス、租税などのフローがあって貨幣が循環していた。そのために主要都市を中心に数多くの貨幣鋳造所が設立され、貨幣の減耗分を埋め合わせるように貨幣（銀貨）が供給されていたと考えられている (Aperghis 2004: 70-73, 245-46, 260-61).

118) Hopkins (1980, 2002), 明石 (2009).

不足が金融仲介を通じ補われるようになる。とりわけ、商業の分野では事業者(商人/船主)が金融仲介者(または銀行家)を介して富裕層などの資金提供者から融資を受け、事業に邁進することができる。また、交易港(*emporion*)などで多くの商人が集まることにより、市場取引が活発化し、同じく交易港で活躍する銀行家から商業行為をスムーズにするため金融サービス(預金, 両替, 振替, 短期融資など)の提供を受ける¹¹⁹⁾。他方では、遠距離の取引にはハイリターンとともにハイリスクがとれない、海上貸付にはリスクを負担しうるような資産を有した富裕層(有力市民, 貴族層, 元老院・騎士階級)から専門に出資を仲介する(*generatores*のような)金融仲介者を経て、交易商人・船主たちに融資を行うルートが出来上がっていた。銀行家には、交易港や都市中心部(アゴラ, フォルム)などローカルな地域で活躍する金融業者がおり、顧客の預金の保全の観点から、ハイリスクな事業には直接の関与を避ける傾向があった¹²⁰⁾。銀行家などの金融業者の社会的地位は、古典期アテナイではもっぱら在留外人の手にあり、非市民として低い状態にあり、ローマ帝政初期では多くは解放奴隷が担っていたことから、やはりその社会的地位は低い状態にあった。

ところがそれ以前のローマ共和制後期では銀行家は必ずしもそのような低い地位にあったわけではなく、活動範囲も決してローカルでなく、事業家と融合した商人的銀行家に近い存在であり、大きな利益を得て裕福になったケースも少なくなかった¹²¹⁾。古典期アテナイでもパシオンのように巨額の資産を残した銀行家がいて、ヘレニズム期では国家銀行が登場し、都

-
- 119) Murecine 文書にあるスルピキウス (*Sulpicii*) 銀行の業務内容として、預金、口座引き落とし、振替、日常的支払い、貸付、投資仲介、オークション資金調達、保釈金、両替などがあげられている (*Rathbone and Temin 2008: 399*)。さらに *Jones (2006: 64-77)* 参照。スルピキウス家を預金銀行家ではなく、単なる金融仲介者とする見解については *Verboven (2008: 220-221)* 参照。
- 120) *Andreau (1999: 43)*, *Verboven (2002: 137-38, 2008: 229)*, *Jones (2006: 77-78)*, *von Reden (2010: 116-17)*。
- 121) *Andreau (1985: 384-85, 1999: 49)*, *Verboven (2002: 138)*。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に市国家とリンクして多くのステークホルダーから出資を受けて、大規模な融資活動を行うことができた。エジプトのケースでは、銀行家は国家の財務機関の一部として位置づけられ、大事業を営む（有力な）顧客層と関係をもって融資活動にも参加していた。その意味で古典期からヘレニズム期にかけて変動をともしないながらも経済活動の活発化に合わせる形で、銀行家と呼ばれる金融業者は狭い意味での銀行家に特定されるのではなく、海外事業（交易）へも積極的に関与したと考えられ、その境界は曖昧なグレーゾーンにあったといつてよい。それだからこそ、彼らの中から巨額の資産を残すような成功者が出てきたわけであり、それは個人的能力以上に、古典期・ヘレニズム期という社会経済的大変動期の中で成功の機会をつかみ取ったという事情があったからと推察される。

最後に、信用供与の枠組みの中で遠隔地間の資金移転を指す「為替」の有無について触れておきたい。一地域の取扱業者に資金を納め、為替を受け取って別地域で別の取扱業者に為替を現金化してもらうという金融サービスは、現在銀行においても取り扱われる業務であるが、古典期・ヘレニズム期では（金融業者同士で扱われる）本業として為替取引は存在しなかったか、または特殊な業務として取り扱われ、為替に似たケースが幾つか見出されるにすぎない。とりわけ、金融業者（銀行家）の間で交わされる形での為替は、明示的には見いだせず、遠隔地間で行われる為替取引は、ローカルな地域で活動する銀行家には不向きであり、むしろ遠隔地間で交易を行う商人／実業者の間でこそ、行える取引であったといつてよい¹²²⁾。

商人的銀行家の存在が認められるのであれば、彼らこそ為替業務を行う能力があったであろう。イソクラテスで見られた商人／交易者の間で取り交わされたアテナイでの融資とボスポラス王国での地方通貨による返済という契約に、銀行家パシオンは契約履行の保証を与える形で関与していたにすぎない¹²³⁾。また紀元前1世紀半ばのキケロのケースでは、友人の

122) Verboven (2002: 138)

アッティクスや徴税請負人 (*publicani*) を通じて為替を振り出してもらい、属州地 (エフェソス、ラーオディケイア) で現金を入手している。仲介者が小アジアで実業家として活動し現地に代理人を置いていたアッティクスや、属州地での徴税業務を行い、税金を回収していた徴税請負人にたいし指示を行いうる位置にあった本国政府が介在しえたからこそ、為替 (*permutatio*) を組むことができた¹²⁴⁾。しかしながら、それを可能にしたのは友人関係ないし政府高官という地位があったからであり、一般対象に為替サービスが提供されていたわけではなかった。この点でも遠隔地間の信用供与を可能にする信頼のネットワークが形成されていなければ、制度として為替取引が成立せず、当時の銀行家が為替取引を恒常的に実現しようとするれば、遠隔地間の商人や銀行家相手に個人的なネットワークを築いていなければならなかったであろう。

銀行家の活動が一般にローカルな活動に (とくに帝政期になると) 終始することが多かったとすれば、遠距離の資金移転をとまなう為替取引は特異なケースであったに違いない。ただし、エジプトのケースをみれば、前1世紀には私的銀行間で (譲渡不可能な形であるが) 小切手のような銀行支払い指図書が発行されており、銀行間でそれぞれの銀行の口座が開設されて資金の移転が口座間で行われるようになっていた¹²⁵⁾。しかしそれでも、その対象は信頼に足る顧客に限定されていたという点で、限定的であったといえる。金融業者間で恒常的な信用ネットワークが制度的に組むことができるかどうかの点で、古典期・ヘレニズム期の銀行家たちはあくまでも個人的な信頼関係に頼っていたのであり、限界があったといわざるをえない。ローマの共和政から帝政に向けて租税・地代の回収と交易による資金

123) Isoc. 17.35

124) Cic. Att. 5.13.2, 11.1.2, Fam. 3.5.4, 5.20.9. *Permutatio* は為替手形 (a bill of exchange) と訳されることが多いが、内容上は信用状 (a letter of credit) がふさわしいとする見解については Verboven (2002: 132) を参照されたい。

125) Bogaert (1994: 102, n. 43, 250-52).

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
の散布というシステムが出来上がっていながらも、ローマやそのほかの都
市の銀行家は為替取引に本格的に取り組むことはなかったようである。公
的為替業務の存在は、*publicani* という徴税請負人の組合で可能となっ
ていたであろうが、その後の帝政期に入り、徴税人の役割が低下し、代わり
に属州ごとに財務管理官 (*procurator*) が設置され、本国・属州間の為替業
務を代行することは理論上可能であったであろう¹²⁶⁾。しかしながら、公
的為替制度については資料上欠落し具体的な姿は見いだせない¹²⁷⁾。この
点で依然未知の状態にあるとあってよいが、資料の点では悲観的な状態に
あるといった方がよいかもしれない。

付録：ca. 433/432BC アテナイ経済の推計

ca. 433/32BC, より正確にはペロポネソス戦争以前の紀元前 430 年代の
アテナイ経済の推計については、基本的に雨宮によって紀元前 4 世紀後半
の同経済の推計のために提示された経済モデルに負っている¹²⁸⁾。このモ
デルに ca. 433/32BC の人口推定値を適用することにより貿易収支を含め
た当該期の経済諸変数を推計した。

ca. 433/32BC の人口については諸推計があり、主要な推計は 30-35 万
人の間に収まっている¹²⁹⁾。雨宮が前 4 世紀後半の人口を 22 万人に仮定し
たことに対応させて、ここでは 30 万人を大きく越えなかっただろうとし
て次のような形でアッティカ人口を 30 万人に想定した。

アテナイにおける社会的階層としては、農業に従事する（貧困な）農民

126) 帝政期属州体制は為替制度の発達に好条件を与えたであろうことは古くから指摘されてきた (Kiebling 1924: 699-700)。帝政期のローマと属州間の商業活動に付随した振替・為替業務の可能性については、さらに明石 (2009: 49-50, n. 65) を参照されたい。

127) Verboven (2009)

128) Amemiya (2007: 106-14)

129) Gomme (1933: 26), Andreades (1933: 290-91, 357), JACT (1984: 157), Goldsmith (1987: 16), Hansen (1988: 12)。他方, Beloch (1886: 100-01) は 23.5 万人, Garnsey (1988: 90) は 25 万人に推定していた。

層 (*thetes*), 富裕層, 製造業・サービス・交易などに従事する都市住民 (Mfg 階層) に分けられ, 農民層と富裕層の人口構成 (市民, 在留外人, 奴隷) は前4世紀半ばの雨宮の設定と基本的に同じであるとし, Mfg 階層については, より多くの市民, 在留外人で構成され, 奴隷の人数はより少ないとした¹³⁰⁾。

(単位: 000人)	農民	富裕者	Mfg 住民 (内労働力)
市民	48	32	80 (20)
在留外人		10	40 (22)
奴隷	10	50	30 (30)
(内鉾山奴隷)		(30)	

各階層の穀物, 食料, その他支出については, 雨宮が想定した穀物・食料比率, (穀物を含めた) 食料・その他支出比率を当該時期の各階層に適用してそれぞれの消費量を導出した¹³¹⁾。431BC 以前の価格については推定がむずかしいのであるが, 賃金水準が 450BC ごろに日当4オボロス程度であり, 大麦価格は *medimnos* (=51.8liters) あたり2ドラクマとされ, 以後になると 415BC ごろの小麦価格は6~6.2ドラクマ, 大麦は410BC に4ドラクマ, 前5世紀末に3ドラクマとされ, 賃金はペロポネソス戦争以後 (431~412) 日当1ドラクマであったとされる¹³²⁾。小麦価格, 大麦価格, 賃金水準が同方向に変動していたことが窺われ, 戦争以後戦費調達もあって貨幣供給が急増し, それが物価上昇を促す一因になったと推測されることから, 小麦価格も戦争以前は同等に低かったと考えて差し支えないであろう。ここでは戦争以前の穀物価格については, 小麦価格が *medimnos* あ

130) 外人成人男子は2.5万人とし (JACT 1984: 157), 家族あわせて5万人とした。外国人の人数はペロポネソス戦争直前にピークを迎えたとされ (Garland 2008: 113), 商業や手工業で在留外人は数的に優位であったとされる (伊藤 1981: 36-39)。

131) Amemiya (2007: Appendices 6.1, 6.2)

132) Figueira (1998: 494), Loomis (1998: 240-42, 253-54), Rathbone and von Reden (2015: Tables A8.2, A8.3).

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に
 たり4ドラクマ、大麦価格は2ドラクマであると想定した。したがって農
 民層、富裕層の穀物生産額、消費額は基本的に紀元前4世紀後半の雨宮推
 計の2/3相当になる。

賃金水準については、市民、外国人は日当4オボロス(4/6ドラクマ)、
 奴隷は2オボロス相当とし、労働力総数7.2万人、年間労働日200日とし
 て計算し、年間賃金総額は1,267タラントン(T)とした。以下、Mfg階
 層は幾つかの部門に分けられるとして、第*i*部門の賃金総額を W_i と記
 し、 x_i を第*i*部門生産額、 r_i をその利潤率とし、原材料費用を生産額の
 半分相当として、雨宮モデルにしたがって部門ごとに次のような方程式を
 想定した¹³³⁾。

$$x_i - 0.5x_i - W_i = r_i x_i \Rightarrow x_i = W_i / (1 - 0.5 - r_i)$$

ここではMfg階層の生産規模が比較的大きくなることをふまえて、規
 模の拡大とともに利潤率は順次低下し、限界部門では利潤率がゼロにな
 ると想定した。簡単化のためにMfg階層は4部門($i=1, 2, 3, 4$)に均等に分
 けられ $W_i = W/4$ 、利潤率はそれぞれ $r_1 = 0.15$ 、 $r_2 = 0.10$ 、 $r_3 = 0.05$ 、
 $r_4 = 0$ を想定した。それぞれの部門の生産額を方程式から求め、合計
 して総生産額は3,034Tとなった。減価償却率を5%とし、雨宮モデルで
 の国内中間需要・輸入比415:700を適用して国内中間費用をもとめ、結
 果Mfg階層から富裕層が受け取る収入は、生産総額から国内中間費用
 508T、減価償却分152T、賃金総額1,267Tを控除した額1,107Tとな
 った。原材料輸入額は原材料費用1,517Tから国内中間費用と減価償却分を
 差し引いた額である857Tとなった。Mfg階層から生産される財・サービ
 スの可能消費額は2,374(=3,034-508-152)Tであり、その他支出総額は
 1,313Tとなるが、前5世紀後半の分業体制は前4世紀ほど分化していな
 かったと想定して支出総額の3/4は自国内で賄われたとすれば(雨宮オリ

133) Amemiya (2007: 109)

ジナルモデルではほぼ半分に想定), 国内消費分は 1,000T, 輸出分は 1,374T となった。他方, 各階層のその他支出の総額 1,313T のうち国内消費分を差し引けば, 輸入額が導かれ, その他支出項目の輸入額は 303T となった。

政府収支については, Christensen (2013: 298-99) にもとづき, Andreades (1933), Goldsmith (1987) を参考にして一部修正して次のように推定した。

収入		支出 (単位: タラントン)	
同盟都市分担金	500	役職給付	150
間接税	60	兵士給付	182
外国人・奴隷税	100	三段櫓船給付・修繕費	198
鉱山収入	150	公共事業	200
公共地代	15~20	祭祀関係	100
レイトゥルギア	150	警察	60
その他	20~25	その他	110
計	1,000		1,000

政府役職給付については, アリストテレス『アテナイ人の国制』¹³⁴⁾ を参考にして, 民衆裁判所 (*dikast*) 参加者は人員 6,000 名で 200 日相当, 日当 2 オボロスとしておよそ 70T 相当とした。評議会 (*boulē*) は, 月番グループ (*prytaneis*) 50 名は日当 4 オボロス, 他の 450 名は 3 オボロスで 325 日勤務するとすれば合計 14T, そのほか地方役人およそ 700 名として日当 3 オボロス, 外国駐在大使を 700 名, 6 オボロスで年間を通して合わせて 65T, ならずと総計 150T 程度となる¹³⁵⁾。兵士給付については, 2,500 人の重装歩兵 (*hoplite*), 1,200 人の騎士, 1,600 人の射手を想定して, 日当 1 ドラクマにして半年分の給付が行われたと想定すると, それぞれの給付総額は 76T, 37T, 48T, 計 161T となる。その他ドックやアクロポリスの警

134) Arist. *Ath. Pol.* 24.3.

135) Andreades (1933: 252-54), Amemiya (2007: 99). 戦争以前の評議会の日当がどの程度であったか不明であるが, 管理者 (*epistatai*) が一日 4 オボロス払われていたのに対して, 民衆裁判所 (*dikast*) では 2 オボロスであったとされる。Loomis (1998: 10-12)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に護兵を 550 人として 4 オボロスの日当とすれば 21T となり、兵士給付総額は 182T となる。三段櫂船 (trireme) の船員給付については、20 隻の護衛用の三段櫂船の船員を 4,000 人とし、貢租収受用の船を 20 隻としてその船員を 2,000 名とすれば、日当 1 ドラクマで半年分の給付を準備したとして合計 180T となる。その他修繕費等として 18T を加えると、その費用は総計 198T となる。その他、公共事業を 200T、祭祀関係費を 100T、治安（警察）関係者を 2,000 人として、3 オボロスの日当とすれば 60T となり、福祉関係（孤児育英費、戦争傷痍者年金など）を 60T、その他 50T として、合計 1,000T とした¹³⁶⁾。

収入はデロス海上同盟都市からの貢租金を 500T、公共地の地代は政府収入の 1.5~2% を占めるであろうとし、幅をもって 15~20T とした¹³⁷⁾。ラウリオン銀山からの収入は、およそ 1,000T の銀採掘額に対し、採掘権と 10% 課税合わせて 150T 相当であるとした¹³⁸⁾。レイトウルギア（公共奉仕）は、三段櫂船の負担 198T の半額程度ならびにその他祭祀関係の奉仕分を含めて 150T とした。その他の収入は科料・没収分などを合わせ 20~25T 程度とした。外国人税は 2.2 万人成人男子と女子等 1.8 万人と想定し、それぞれ 12 ドラクマ、6 ドラクマの人頭税を課して総計 62T となる。奴隷税は Bücher の推計に従い、奴隷価格 200 ドラクマ、奴隷取引の取引総数を 57,000、2% の税率を前提にして、かなり高めであるが 38T とした¹³⁹⁾。関税は主要物資の直接の輸入・輸出総額およそ 4,000T に対

136) 内容の一部は Andreades (1933: 218-20), Goldsmith (1987: 32-33) に負っており、合計金額は *Xen. Anab.* 7.1.27 による。

137) Papazarkadas (2011: 94)。紀元前 4 世紀の事情であるが、この時期へ適用した。

138) 採掘額については Sverdrup and Schlyter (2012)。さらに Goldsmith (1987: 259-60, n. 38) では産出額は 930~1250T とされ、Andreades (1933: 270) では採掘リース料は 50~100T と推定されている。ここでは下限を取り 10% 税合わせて 150T とした。採掘権と課税の議論については Hopper (1953), Mattingly (1996: 241) ならびに伊藤 (1981: 158-65) を参照されたい。

139) Andreades (1933: 283)

し1%の関税率からおよそ40Tの収入があり、またその半額相当の市場税があったとして合わせて60Tの間接税(関税・市場税)収入を計上した。

富裕層についてはMfg部門からの事業収入(利潤プラス輸入代金)、Mfg階層ではその賃金総額の10%相当がそれぞれ奴隷を含めた海外交易に何らかの形で関係していたと想定して、間接税はそれら金額に応じて富裕層とMfg階層に振り分けた。外国人税はそれぞれの階層の外国人数に対応させて振り分け、結果間接税・外国人税は富裕層全体で93T、Mfg階層で57Tとした。富裕層は他に鉱山税ならびにレイトゥルギア(公共奉仕)、その他合計350Tを負担するものとして、合計443Tの負担となった。政府からの給付については、評議会・裁判所に参加可能な市民を農民層では12,000人、富裕層では8,000人、Mfg市民では10,000人とし、軍事面では農民層は同じ12,000人、富裕層では市民、外国人合わせて12,000人、Mfg階層では両者合わせて20,000人とした。評議会・裁判所には市民層が参加し、重装歩兵と騎士は富裕層が参加し、三段櫂船は市民層とMfg外国人が参加するものとした。兵士は農民、Mfg市民、外国人から参加した。対応した各階層から均等に参加したものとして、各階層の参加可能な人口に案分させて評議会・裁判所、重装歩兵、騎士、三段櫂船、兵士の給付額を振り分けた。結果、農民層の給付総額は162T、富裕層は189T、Mfg階層は221Tとなった¹⁴⁰⁾。

次の表でca. 433/432BCの各部門(農民層、富裕層、Mfg階層、政府、海外)の収支が表示されている。貿易額(輸出または輸入)は2,703Tにおよび、Mfg階層生産物の輸出額は1,374Tになっている。製造物の輸出額は当時の分業状態から過大ではないかという批判が出てくるであろうが、それに応えるため試算として各階層の貯蓄(銀保有)はないものと仮定し、

140) ここではポティダイアの戦役以前を想定しており、戦費は省かれている。ケルキュラ(433BC)やトラキア(422BC)への戦費は30~100Tと推定されており、この分は計上するとすれば海外への資金流出追加分となる(Andreades 1933: 222, n. 8)。

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心にさらにそれら階層のその他支出はすべて国内産で賄われる（つまり、その他支出項目の輸入はない）と仮定して同じように貿易収支を算出してみた。その結果、食料以外のその他支出項目の輸出額は 872T に減少し、原材料輸入は 857T、輸出（輸入）総額は 2,388T になった。製造物の輸入を極力低い状態に想定してもアテナイからの製造物輸出は相当分想定せざるを得ない。さらに人口を低位推計 25 万人に設定した場合には（Mfg 階層市民を 4 万人、奴隷を 2 万人に想定）、同じような試算をするとその他支出項目の輸出は 334T に大きく減少し、輸出総額は 1,851T になった。しかしながら、原材料輸入 631T に対し半分強の製造物の輸出が依然想定されることは否定できなかった。

他方で貿易総額が比較的小さな金額になっているのは、物価・賃金水準を戦争期間 (431~412BC) の水準の 2/3 という低位水準に設定したことによってだが、431BC 直後の物価・賃金水準がそれ以前の 1.5 倍になっていたとすれば、その推計額は大きく増加し、Mg 生産物の輸出が 2,845T、穀物輸入が 947T、その他食料と生産物輸入が 1,340T、原材料輸入が 1,398T となり、輸出（輸入）総額が 3,828T となって、1,000T 以上の増額となった。これに戦費を加わったとすれば、その分相応の貿易赤字を計上していたと考えられる。戦争直前の推計に関しては、物価・賃金がどの程度まで上昇していたかによって金額が大きく異なってくることに留意しなければならない。

表にはさらに ca. 339/338BC の収支が載せられているが、雨宮推計値 (Amemiya 2007: 108-111) の一部が修正されて表示されている。雨宮推計では政府部門の戦争貢献分・戦利品の項目が 329T になっていたのであるが、第 2 次海上同盟が崩壊した 357BC 以降、アテナイ以外の都市からの貢献分は大きく低下して、その数値は 46-60T になったとされている¹⁴¹⁾。ここでは貢献分を 60T に修正し計上している。さらにリュクルゴスの改革

141) Andreades (1933: 313). 60T は 343BC 直前の時期とされる (Aischines, II. 71)。

(336-324BC) が進展すると、政府収入は直前の600T から1,200T へ倍増したとされる。その増加分に寄与した主要因は、交易の活性化にあったとされ、とくに中継貿易が飛躍的に増加したことによると考えられている¹⁴²⁾。もし再輸出分とそれに対応する輸入分を合わせた中継交易総額な

(単位：タラントン)

紀元前5世紀後半 (ca. 433/432BC)					ca. 339/338BC					
農民層	富裕層	Mgf 階層	政府	輸出		農民層	富裕層	Mgf 階層	政府	輸出
166	50				生産(大麦)	249	75			
	69				生産(小麦)		103			
245	190				その他食料	334	285			
		1,267			賃金			867		
	1,107				配当利潤		1,071			
	1,000			762	鉱山収入		1,000			825
162	189	221			国家給付	261	230	197		
			500	500	貢租・分担金				60	60
			500		税金				654	
				67	農産物輸出					100
				1,374	Mfg 輸出					1,466
573	2,605	1,487	1,000	2,703	収入	844	2,764	1,064	714	2,451
										輸入
137				245	大麦消費(市民)	206				369
	81	238	20	426	小麦消費(市民)		122	89		243
	27	129			小麦消費(外国人)		40	95		
29	196	100			大麦消費(奴隷)	43	294	150		
289	262	462	50	695	その他食料	434	393	329		637
97	457	440	308	303	その他支出	146	386	285		345
	443	57		0	税負担	0	584	70		
12	103	62		177	奴隷輸入	15	116			131
	857			857	原材料輸入		700			700
9	179		50		銀保有		129	46		
			572	0	国家給付・基金・軍船				688	
				0	戦費				26	26
574	2,605	1,488	1,000	2,703	支出	844	2,764	1,064	714	2,451

142) Burke (1985: 260-64)

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心にらびに関連する収入（倉庫、ドック、船舶修繕などからの収入）が政府収入の増加分であったとし、試算として再輸出向け輸入が5,580T、再輸出6,000Tとすれば、2%の関税率と港湾施設使用料を合わせた金額は420Tほどになる（中継交易総額の3.6%に相当する）。表中のca. 339/38BCの政府部門の税収にこの金額を加えると、1,200Tに近い収入が計上されることになる。この試算は、再輸出分が総輸出の7割に及ぶという結果になり、いかに再輸出の急成長が政府収入の増加に必要であったかを示唆している。

最後に、ペロポネソス戦争が終結した後、前4世紀初めの貿易収支を試算してみた。戦争の影響によりMg部門の人口が大きく減少したと想定し、その市民の人口が1万人、在留外人が1万人、奴隷が1.5万人とし、前二者の労働力が合計1.1万人とし、鉱山奴隷もいなくなったとして、全体の人口を15万人と想定した。貢租金や鉱山収入がなくなったと想定し、輸出額が1,566Tとなり、輸入額は2,455Tとなり、890Tの赤字（輸入額の36%）と推定された。その分銀貨の流出となり、資金が枯渇すれば輸入とくに穀物以外の食料、その他支出は強制的に抑制されざるをえなかったであろう。

参考文献

- Acton, P. (2014), *Poiesis: Manufacturing in Classical Athens*, Oxford.
- Alston, R. (1998), "Trade and the City in Roman Egypt," in H. Parkins and C. Smith, eds., *Trade, Traders and the Ancient City*, Routledge: 168-202.
- Amemiya, T. (2007), *Economy and Economics of Ancient Greece*, Routledge.
- Andreades, A. M. (1933), *History of Greek Public Finance*, vol. I, Harvard University Press.
- Andreau, J. (1985), "Modernité économique et statut des manieurs d'argent," MEFRA (*Melanges de l'école Française de Rome, Antiquité*) 97: 373-410.
- Andreau, J. (1987), *La vie financière dans le monde romain, Les métiers de manieurs d'argent (IVe siècle av. J.-C.-IIIe siècle apr. J.-C.)*, Bibliothèque des Écoles françaises d'Athènes et Rome.
- Andreau, J. (1997), "Roman Financial System: Italy, Europe and the Mediterranean:

- Relations in Banking and Business during the Last Centuries BC,” in *Patrimoine, échange et prêts d’argent: l’économie romaine*, L’ERMA di BRETSCHNEIDER: 119–32.
- Andreau, J. (1999), *Banking and Business in the Roman World*, Cambridge.
- Aperghis, M. (2001), “Population-Production-Taxation-Coinage: A Model for the Seleukid Economy,” in Z. Archibald, J. Davies, V. Gabrielsen and G. J. Oliver, eds., (2001): 69–102.
- Aperghis, M. (2004), *The Seleukid Royal Economy; The Finances and Financial Administration of the Seleukid Empire*, Cambridge.
- Archibald, Z., J. K. Davies, V. Gabrielsen and G. J. Olver, eds. (2001), *Hellenistic Economies*, Routledge.
- Archibald, Z., J. K. Davies and V. Gabrielsen eds. (2005), *Making, Moving and Managing: The New World of Ancient Economies, 323-31BC*, Oxford.
- Archibald, Z., J. K. Davies and V. Gabrielsen, eds. (2011), *The Economies of Hellenistic Societies, Third to First Centuries BC*, Oxford.
- Artz, J. (2008), *The Effect of Natural Resources on Fifth Century Athenian Foreign Policy and the Development of the Athenian Empire*, Tufts University, Classical Archaeology, ProQuest.
- Bagnall, R. S. and R. Bogaert (1975), “Orders for Payment from a Banker’s Archive: Papyri in the Collection of Florida State University,” *Ancient Society* 6: 79-108.
- Beloch, J. (1886), *Die Bevölkerung der Griechisch-Römischen Welt*, Arno Press.
- Belthold, R. (2009), *Rhodes in the Hellenistic Age*, Cornell University Press.
- Bogaert, R. (1965), “Banquiers, courtiers et prêts maritimes à Athènes et à Alecandrie,” *Chronique d’Egypte* 40: 140–56.
- Bogaert, R. (1968), *Banques et banquiers dans les cités grecques*, A. W. Sijthoff-Leyde.
- Bogaert, R. (1986), “La banque à Athènes au IV^e siècle avant J.-C. État de la question,” *Museum Helveticum* 43:19–49.
- Bogaert, R. (1991), “Zénon et ses banquiers,” *Chronique d’Egypte* 66: 308-15.
- Bogaert, R. (1994), *Trapezitica Aegyptiaca. Recueil de recherches sur la banque en Égypte gréco-romaine*, Edizioni Gonnelli.
- Bogaert, R. (1998), “Liste géographique des banques et des banquiers de l’Égypte ptolémaïque,” *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 120: 165–202.
- Bogaert, R. (1998/99), “Les opérations des banques de l’Égypte ptolémaïque,”

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

- Ancient Society* 29: 49–145.
- Bresson, A. (2016), *The Making of the Ancient Greek Economy: Institutions, Markets, and Growth in the City-States*, Princeton University Press.
- Burke, E. (1984), “Eubulus, Olynthus, and Euboea,” *Transactions of the American Philological Association* 114: 111–20.
- Burke, E. (1985), “Lycurgan Finances,” *Greek, Roman and Byzantine Studies* 26, n. 3: 251–64.
- Burke, E. (1990), “Athens after the Peloponnesian War: Restoration Efforts and the Role of Maritime Commerce,” *Classical Antiquity* 9: 1–13.
- Burke, E. (2010), “Finances and the Operation of the Athenian Democracy in the ‘Lycurgan Era,’” *American Journal of Philology* 131: 393–423.
- Burkert, W. (1992), *The Orientalizing Revolution: Near Eastern Influence on Greek Culture in the Early Archaic Age*, Harvard University Press.
- Cahill, N. and J. H. Kroll (2005), “Archaic Coin Finds at Sardis,” *American Journal of Archaeology* 109: 589–617.
- Casson, L. (1954), “The Grain Trade of the Hellenistic World,” *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 85: 168–87.
- Christensen, P. (2013), “Finance,” in N. Wilson ed., *Encyclopedia of Ancient Greece*, Routledge.
- Carrdice, I. (1987), “The ‘Regal’ Coinage of the Persian Empire,” in I. Carrdice, ed., *Coinage and Administration in the Athenian and Persian Empires. The Ninth Oxford Symposium on Coinage and Monetary History*, BAR 343, Oxford: 73–95.
- Clarysse, W., and K. Vandorpe (1997), “Viticulture and Wine Consumption in the Arsinoite Nome (P. Köl V221),” *Ancient Society* 28: 67–73.
- Cohen, E. E. (1992), *Athenian Economy and Society*, Princeton University Press.
- Crawford, D. J. (1971), *Kerkeosiris. An Egyptian Village in the Ptolemaic Period*, Cambridge.
- Crawford, M. H. (1974), *Roman Republican Coinage*, Cambridge.
- de Callatay, F. (2006), *Quantifications et Numismatique Antique*, Choix d’articles (1984–2004), Moneta Wetteren.
- de Callatay, F. (2011), “Quantifying Monetary Production in Greco-Roman Times: A General Frame,” in F. de Callatay, ed., *Quantifying Monetary Supplies in Greco-Roman Times*, Edipuglia: 7–29.
- Draws, R. (1993), *The End of the Bronze Age: Changes in Warfare and the*

- Catastrophe ca. 1200*, Princeton University Press.
- Empereur, J.-Y. (1998), “Les amphores complètes du Muse d’Alexandrie: importations et productions locales,” in J.-Y. Empereur ed., *Commerce et artisanat dans l’Alexandrie hellénistique et romaine. Actes du colloque d’Athènes organisé par le CNRS, le Laboratoire de céramologie de Lyon et L’École française d’Athènes, 11–12 décembre 1988*. BCH Suppl. 33. Athens: 393–99.
- Erxleben, E. (1974), “Die Rolle der Bevölkerungsklassen im Außenhandel Athens im 4. Jahrhundert v. u. Z.,” E. Ch. Welskopf, ed., *Hellenische Poleis I*, Berlin: 460-520.
- Erxleben, E. (1975), “Das Verhältnis des Handels zum Produktionsaufkommen in Attika im 5. und 4. Jahrhundert v. u. Z.,” *Klio* 57: 365-98.
- Esty, W. W. (2011), “The Geometric Model for Estimating the Number of Dies,” in F. de Callatay, ed. *Quantifying Monetary Supplies in Greco-Roman Times*, Edipuglia: 43–58.
- Faraguna, M. (2008), “Calcolo economico, archive finanziari e credito nel mondo Greco tra VI e IV sec. a.C.,” in Verboven K., K. Vandorpe, and V. Chankowski, eds., *Pistoi Dia ten Technen. Bankers, Loans and Archives in the Ancient World. Studies in Honour of Raymond Bogaert. Studia Hellenistica* 44, Peeters: 33-57.
- Fischer-Bovet, C. (2014), *Army and Society in Ptolemaic Egypt*, Cambridge.
- Figueira, T. (1998), *The Power of Money: Coinage and Politics in the Athenian Empire*, University of Pennsylvania Press.
- Finely, M. I. (1978), “The Fifth-Century Athenian Empire: a Balance Sheet,” in P. Garnsey and C. Whittaker, *Imperialism in the Ancient World*, Cambridge: 103-26.
- Flament, C. (2007), *Le monnayage en argent d’Athènes*, Association de numismatique professeur Marcel Hoc..
- Frank, T. (1920), *An Economic History of Rome to the End of the Republic*, Johns Hopkins Press.
- Fraser, P. M. (1972), *Ptolemaic Alexandria*. Vols. I-III, Oxford.
- Gabrielsen, V. (1997), *The Naval Aristocracy of Hellenistic Rhodes*, Aarhus University Press.
- Gabrielsen, V. (2005), “Banking and Credit Operations in Hellenistic Times,” in Z. H. Archibald, J. K. Davies, and V. Gabrielsen, eds., (2005): 136-64.
- Garland, R. (1987), *The Piraeus: From the Fifth to the First Century B.C.*, Cornell

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

University Press.

Garland, R. (2008), *Daily Life of the Ancient Greeks*, 2nd ed., ABC-CLIO.

Garnsey, P. (1988), *Famine and Food supply in the Graeco-Roman World*, Cambridge University Press.

Garnsey, P. (1998), *Cities, Peasants and Food in Classical Antiquity: Essays in Social and Economic History*, Cambridge.

Gomme, A. W. (1933), *The Population of Athens in the Fifth and Fourth Centuries BC*, Oxford.

Goldsmith, R. W. (1987), *Premodern Financial Systems*, Cambridge.

Grace, V. R. (1985), "The Middle Stoa Dated by Amphora Stamps," *Hesperia* 54.1: 1-54.

Hadji, A. and Z. Kontes (2005), "The Athenian Coinage Decree: Inscriptions, Coins and Athenian Politics," in *XIII Congreso Internaciaonal de Numismática, Madrid, 2003: Actas-Proceedings-actes/ coord. por C. A. Asins, C. M. Alonso, P. O. Morán*, vol. 1, 2005: 263-68.

Hansen, M. H., (1988), *Three Studies in Athenian Demography*, Kgl. Danske Videnskanbernes Selskab.

Hansen, M. H. (2006), *Studies in the Population of Aigina, Athens and Eretria*, Kgl. Danske Videnskabernes Selskab.

Harl, K. W. (1996), *Coinage in the Roman Economy 300BC to AD700*, Johns Hopkins University Press.

Harris, E. M. (2002), "Workshop, Marketplace and Household: The Nature of Technical Specialization in Classical Athens and Its Influence on Economy and Society," in P. Cartledge, E. E. Cohen, and L. Foxhall, eds., *Money, Labour and Land: Approaches to the Economies of Ancient Greece*, Routledge, 2002: 67-99.

Hicks, J. (1969), *A Theory of Economic History*, Oxford.

Hopkins, K. (1980), "Taxes and Trade in the Roman Empire (200BC-AD400)," *Journal of Roman Studies* 70: 101-25.

Hopkins, K. (2002), "Rome, Taxes, Rents and Trade," in W. Scheidel and S. von Reden, eds., *The Ancient Economy*, Routledge: 190-230.

Hopper, R. J. (1953), "The Attic Silver Mines in the Fourth Century B.C.," *Annual of the British School at Athens*, 48: 200-54.

Hopper, R. J. (1979), *Trade and Industry in Classical Greece*, Thames and Hudson.

Howgego, C. (1995), *Ancient History from Coins*, Routledge.

- Isager, S. and M. H. Hansen (1975), *Aspects of Athenian Society in the Fourth Century B.C.*, Odense University Press.
- Jacobsen, Th. (1982), *Salinity and Irrigation Agriculture in Antiquity. Diyala Basin Archaeological Projects: Report on Essential Results, 1957-58*, Malibu.
- JACT (Joint Association of Classical Teachers) (1984), *The World of Athens*, Cambridge.
- Jansen, J. N. (2007), *After Empire: Xenophon's "Poroi" and the Reorientation of Athens' Political Economy*, Dissertation, the University of Texas at Austin, ProQuest.
- Jardé, A. (1925), *Les Céréales dans l'antiquité greque*, E. De Boccard.
- Kay, P. (2014), *Rome's Economic Revolution*, Oxford.
- Kießling, G. (1924), "Giroverkehr" in *Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft. Neue Bearbeitung, hrsg. Von Georg Wissowa, forgeföhrt von Wilhelm Kroll et al. Supplementband 4*. Druckenmüller: 696-709.
- Kim, H. (2001), "Archaic Coinage as Evidence for the Use of Money," in A. Meadows and K. Shipton, eds., *Money and Its Uses in the Ancient Greek World*, Oxford: 7-22.
- Kroll, J. H. (2008), "The Monetary Uses of Weighed Bullion in Archaic Greece," in W. Harris, ed., *The Monetary Systems of the Greeks and Romans*, Oxford: 12-37.
- Kroll, J. H. and N. M. Waggoner (1984), "Dating the Earliest Coins of Athens, Corinth and Aegina," *American Journal of Archaeology* 88: 325-40.
- Kraay, C. (1976), *Archaic and Classical Greek Coins*, Methuen.
- Lawall, M. L. (2005), "Amphoras and Hellenistic Economies: Addressing the (Over) Emphasis on Stamped Amphora Handles," in Z.H. Archibald, J. K. Davies, and V. Gabrielsen, eds., (2005): 188-232.
- Lewis, N. (2001), *Greeks in Ptolemaic Egypt: Case Studies in the Social History of the Hellenistic World*, American Society of Papyrologists.
- Loomis, W. T., (1998), *Wages, Welfare Costs and Inflation in Classical Athens*, University of Michigan Press.
- Lund, J. (2000), "Transport Amphorae as Evidence of Exportation of Italian Wine and Oil to the Eastern Mediterranean in the Hellenistic Period," in J. Lund and P. Pentz, eds., *Between Orient and Occident: Studies in Honour of P. J. Riis*, National Museum of Denmark: 77-99.
- Lund, J. (2011), "Rhodian Transport Amphorae as a Source for Economic Ebbs and

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

- Flows in the Eastern Mediterranean in the Second Century BC,” in Z. H. Archibald, J. K. Davies, and V. Gabrielsen, eds. (2011): 280-95.
- Manning, J. G. (2010), *The Last Pharaohs: Egypt under the Ptolemies, 305-30BC*, Princeton University Press.
- Mattingly, H. B. (1996), *Athenian Empire Restored: Epigraphic and Historical Studies*, University of Michigan Press.
- Mattingly, H. B. (1999), “Review,” *American Journal of Archaeology* 103: 712-13.
- Meiggs, R. (1972), *The Athenian Empire*, Oxford.
- Millett, P. (1991), *Lending and Borrowing in Ancient Athens*, Cambridge.
- Moreno, A. (2007), *Feeding the Democracy: The Athenian Grain Supply in the Fifth and Fourth Centuries BC*, Oxford.
- Morris, I. (2006), “The Growth of Greek Cities in the First Millennium BC,” in G. Storey ed., *Urbanism in the Preindustrial World: Cross-Cultural Approach*, Univ. Alabama Press: 27-51.
- Morris, I. (2009), “The Greater Athenian State,” in I. Morris and W. Scheidel eds., *The Dynamics of Ancient Empires, State Power from Assyria to Byzantium*, Oxford: 99-177.
- Oliver, G. J. (2007), *War, Food, and Politics in Early Hellenistic Athens*, Oxford.
- Osborne, R. (1987), *Classical Landscape with Figures*, George Philip.
- Osborne, R. (1996), *Greece in the Making. 1200-479BC*, Psychology Press.
- Osborne, R. (2002), “Economics and Politics of Slavery at Athens,” in A. Powell, ed., *The Greek World*, Routledge: 27-43.
- Panagou, T. (2016), “Patterns of Amphora Stamps Distribution, Tracking down Export Tendencies,” in M.H. Harris, D. M. Lewis and M. Woolmer, eds., *The Ancient Greek Economy; Markets, Households and City-States*, Cambridge: 207-29.
- Papazarkadas, N. (2011), *Sacred and Public Land in Ancient Athens*, Oxford.
- Rathbone, D. and P. Temin (2008), “Financial Intermediation in First-Century AD Rome and Eighteenth-Century England,” in Verboven K., K. Vandorpe, and V. Chankowski, eds., *Pistoi Dia ten Technen. Bankers, Loans and Archives in the Ancient World. Studies in Honour of Raymond Bogaert. Studia Hellenistica* 44, Peeters: 371-420.
- Rathbone, D. and von Reden, S. (2015), “Mediterranean Grain Prices in Classical Antiquity,” in R. J. van der Spek, Bas van Leeuwen and Jan Luiten van Zanden, eds., *A History of Market Performance; From Ancient Babylonia to*

- the Modern World*, Routledge: 149-235.
- Rauh, N. K. (1993), *The Sacred Bonds of Commerce: Religion, Economy, and Trade Society at Hellenistic Roman Delos*, Gieben.
- Rauh N. K. (1999), “Rhodes, Rome, and the Eastern Mediterranean Wine Trade, 166-88BC,” in V. Gabrielsen et al. eds., *Hellenistic Rhodes: Politics, Culture, and Society*, Studies in Hellenistic Civilization IX, Aarhus: 162-86.
- Rhodes, P. J. (2008), “After the Three-Bar “Sigma” Controversy: The History of Athenian Imperialism Reassessed,” *The Classical Quarterly* 58: 500-506.
- Rostovtzeff, M. (1941), *The Social and Economic History of the Hellenistic World*. 3 vols., Oxford.
- Sallares, R. (1991), *The Ecology of the Ancient Greek World*, Cornell University Press.
- Ščeglov, N. (1990), “Le commerce du blé dans le Pont septentrional (seconde moitié du VIIIe-Ve siècle),” *Annales littéraires de l’Université de Besançon* 427: 141-59.
- Schaps, D. M. (2004), *The Invention of Coinage and the Monetization of Ancient Greece*, University of Michigan Press.
- Scheidel, W. (2004), “Creating a Metropolis: A Comparative Demographic Perspective,” in W. V. Harris and R. Giovanni, eds., *Ancient Alexandria between Egypt and Greece*, Brill: 1-31.
- Scheidel, W. (2007), “A Model of Real Income Growth in Roman Italy,” *Historia: Zeitschrift für Alte Geschichte*, 56: 322-46.
- Scheidel, W. and S. J. Friesen (2009), “The Size of the Economy and the Distribution of Income in the Roman Empire,” *Journal of Roman Studies* 99: 61-91.
- Seaford, R. (2004), *Money and the Early Greek Mind: Homer, Philosophy, Tragedy*, Cambridge.
- Strauss, B. (2014), *Athens after the Peloponnesian War, (Routledge Revivals): Class, Faction and Policy 403-386BC*, Routledge.
- Strauss, J. (2013), *Shipwrecks Database, The Oxford Roman Economy Project*, Oxford University, oxrep.classics.ox.ac.uk/databases/shipwrecks_database/.
- Sverdrup, H. U. and P. Schlyter (2012), “Modeling the Survival of Athenian Owl Tetradrachmas Struck in the Period from 561-42BC from then to the Present,” in *Proceedings of the 30th International Conference of the Systemdynamics Society*, 2012.
- Tandy, D. W. (1997), *Warriors into Traders, The Power of the Market in Early*

古代東地中海地域における国家、貨幣、銀行：アテナイ、エジプト、ローマを中心に

- Greece, University of California Press.
- Thirlwall, C. (1840), *A History of Greece*, vol. 7, Longman.
- Thompson, W. E. (1979), “A View of Athenian Banking,” *Museum Helveticum* 36: 224-41.
- Thompson, D. J. (1983), “Nile Grain Transport under the Ptolemies,” in P. D. A. Garnsey, K. Hopkins and C.R. Whittaker, eds., *Trade in the Ancient Economy*, Cambridge: 64-75.
- Tsetskhladze, G. R. (2008), “Grain for Athens: the View from the Black Sea,” in R. Alston and O. von Nijf, eds., *Feeding the Ancient City*, Peeters: 47-62.
- Turner, E. (1984), “Ptolemaic Egypt,” in F. W. Walbank, et al., eds., *The Cambridge Ancient History 2nd ed., vol. VII: Prt. 1. The Hellenistic World*, Cambridge: 118-74.
- van der Spek, R. J., P. Foldvari and B. van Leeuwen (2015), “Growing Silver and Changing Prices: The Development of the Money Stock in Ancient Babylonia and Medieval England,” in R. J. van der Spek, B. van Leeuwen and J. Luiten van Zanden, eds., *A History of Market Performance: From Ancient Babylonia to the Modern World*, Routledge: 489-505.
- van Leeuwen, B., P. Foldvari and J. L. van Zanden (2015), “Long-run Patterns in Market Performance in the Near East, the Mediterranean and Europe from Antiquity to c. AD 1800,” in R.J. van der Spek, B. van Leeuwen and J. Luiten van Zanden, eds., *A History of Market Performance: From Ancient Babylonia to the Modern World*, Routledge: 506-25.
- Verboven K. (2002), *The Economy of Friends: Economic Aspects of Amicitia and Patronage in the Late Republic*, Latomus.
- Verboven K. (2008), “*Faeneratores, Negotiatores* and Financial Intermediation in the Roman World (Late Republic and Early Empire),” in Verboven K., K. Vanderpe, and V. Chankowski, eds., *Pistoi Dia ten Technen. Bankers, Loans and Archives in the Ancient World. Studies in Honour of Raymond Bogaert. Studia Hellenistica* 44, Peeters: 211-229.
- Verboven K. (2009), “Currency, Bullion and Accounts. Monetary Modes in the Roman World,” *Belgisch Tijdschrift voor Numismatiek en Zegelkunde/Revue Belge de Numismatique et de Sigillographie* 155: 91-121.
- von Reden, S. (2007), *Money in Ptolemaic Egypt, From the Macedonian Conquest to the End of the Third Century BC*, Cambridge.
- von Reden, S. (2010), *Money in Classical Antiquity*, Cambridge.

- von Reden, S. (2011), "Demand Creation, Consumption, and Power in Ptolemaic Egypt," in Z. H. Archibald, J. K. Davies, and V. Gabrielsen, eds. (2011): 421-40.
- Will, E. L. (1982), "Greco-Italic Amphoras," *Hesperia* 51: 338-56.
- Will, E. L. (1997), "Shipping Amphoras as Indicators of Economic Romanization in Athens," in M. C. Hoff and S. I. Rotroff, eds., *The Romanization of Athens: Proceedings of an International Conference held at Lincoln, Nebraska*, Oxbow Monograph 94: 117-33.
- Will, E. L. (2000), "The Roman Amphora, Learning from Storage Jars," *Archaeology Odyssey*, Jan-Feb: 26-35.

- 明石茂生 (2009) 「古代帝国の国家と市場の制度的補完性 (1): ローマ帝国」『成城大学経済研究』185: 1-91。
- 伊藤貞夫 (1981), 『古典期のポリス社会』岩波書店。
- 桜井万里子・本村凌二 (1997), 『世界の歴史5: ギリシアとローマ』中央公論社。
- 周藤芳幸 (2014) 『ナイル世界のヘレニズム エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会。
- 周藤芳幸 (2016) 「ヘレニズム時代東地中海のワイン交易—エジプトからの視点—」『西アジア考古学』17: 59-66。
- 柘植一雄 (1969) 「プトレマイオス王朝」『岩波講座世界歴史2』岩波書店: 204-21。
- 波部雄一郎 (2014) 『プトレマイオス王国と東地中海世界: ヘレニズム王権とディオニュシズム』関西学院大学出版会。
- 前沢伸行 (1977a) 「紀元前5, 4世紀のアテナイにおける海上貿易と *ἐκδοσις*」『西洋古典学研究』25: 43-53。
- 前沢伸行 (1977b) 「紀元前四世紀のアテナイの海上貿易—海上貸付の分析を中心に—」弓削達・伊藤貞夫編『古典古代の社会と国家』東京大学出版会: 107-46。
- 鷺田陸朗 (2005) 「ローマ期イタリアにおけるワイン産地ブランドの誕生」『古代文化』57-9: 28-40。